

空襲警報

海野十三

青空文庫

日本海の夕日

大きな夕日は、きょうも日本海の西の空に落ちかかった。うねりの出て来た海上は、どこもここもキラキラと金色に輝いていた。

「美しいなあ！」

旗男^{はたお}少年は、得意の立^{たち}泳^{およぎ}をつづけながら、夕日に向かって

挙手の礼をささげた。こんな入日^{いりひ}を見るようになってから、もう

三日目、いよいよお天気が定まって本当の真夏になったのだ。

「オイ旗男君。沖を向いて、一体誰^{だれ}に敬礼しているんだい」

後から思いがけない声が旗男に呼びかけた。驚いて後をふりむくと、波の間から頑丈なイガ栗坊主の男の顔が、白い歯をむき出して笑っていた。

「ああ……誰かと思つたら、義兄さん！」

それは義兄あにの陸軍中尉川村国彦かわむらくにひこだった。旗男の長姉ちやうしにあ

たる露子つゆこが嫁いとつでいるのだった。旗男は、東京の中学の二年生で、

夏休を、この直江津なおえつの義兄の家でおくるためにきているのだった。

「義兄さんずいぶん家へ帰つてこなかったですね。きょう休暇ですか」

「そうだ。やつとお昼から二十四時間の休暇が出たんだよ。露子がおごちそうをこしらえて待つている。迎えかたがた、久しぶりで

塩っからい水をなめにきたというわけさ。ハツハツハツ」

「塩っからい水ですつて？　じゃあ、また海の中で西瓜すいか取とりをやりましようか」

「それが困ったことに、来るとき、西瓜を落してしまったんだよ」「えッ落したツ？　ど、どこへ落したんです。割れちやつたの？」

「ハツハツハツ、割れはしなかつたがね。ボチャンと音がして、深いところへ……」

「深いところへつて？　流れちやつたんですか」

「流れはしないだろう。綱をつけといたからね。ハツハツハツ」

「綱を……ああわかつた。なーんだ、井戸の中へ入れたんでしよう……。また義兄さんに一杯くわされたなア」

「まだくわせはしないよ。さあ、早く帰ってみんなでくおうじゃないか」

二人はくるりと向きを変えると、肩をならべて平泳で海岸の方へ泳ぎだした。

「義兄さん、お天気が定まったせいとか、日本海も太平洋と同じように穏かですね」

「ウン、見懸みかけだけは穏かだなア……」

国彦中尉は、なんとなく奥歯に物の挟はさまったような言いかたをして、妙に黙った。

「見懸は穏かで、本当は穏かでないんですか。どういうわけですか、義兄さん！」

「ウフフ、旗男君にはわかつとらんのかなア。君はいま、沖を見て拳手の礼をしていたね。あれは日本海を向こうへ越えた国境附近で、御国のために生命を投げだして働いている、わが陸海軍將兵のために敬意を表していたのかと思つたんだが、そうじゃなかつたのかね」

「ええ、敬礼は太陽にしていたんです。……がその国境で何かあつたんですか。例の国境あらそいで、世界一の陸空軍国であるS国と小ぜりあいをしているつて聞いてはいましたが、……いよいよ宣戦布告をして戦争でも始めたのですか」

「さあ、何ともいえないが、とにかく穏かならぬ雲行だ。それにこれからは、昔の戦争のように、前まえもつ以て戦を始めますぞといいくさ

う宣戦布告なんかありやしないよ。S国の極東軍と来たら数年前の調べによつても、たいへんな数で、わが中国東北部駐屯軍^{ちゆうとうんぐん}の六倍の兵力を国境に集め、飛行機も一千台、ことに五トンという沢山^{たくさん}の爆弾を積みこむ力のある重爆撃機が、数十台もこつちを睨^{にら}んでいる。そしていざといえ、国境を越えて時速三百キロの速力で日本へやつて来て爆弾を撒^まきちらした上、ゆうゆうと自国へ帰つてゆくことが出来る。実に凄^{すご}いやつだ。そんな物凄いやつを遠いところから、わざわざ日本の近くにもつて来ているし、軍隊をしきりに国境近くに集め、毎日のように中国東北部をおびやかしている。もう宣戦布告ぬきの戦争が始まっているようなものだ。お天氣が定まってくると油断がならない。昔、蒙古^{もうこ}の大軍

が兵船を連ねて日本に攻めてきたときには、はからずも暴風雨に遭つて、海底の藻屑もくずになつてしまつたが、今日ではお天気の調べがついているから、暴風雨などを避けるのは訳のないことだ。お天気が続くことが分かつたら、いつやつて来るか知れない」

「いやだなあ！ お天気はもう三日も続いているのですよ。するとこれは危いのかな。ちつともそんな気はしないのだけれど……」

旗男はクルリと寝泳に移つて沖をふりかえつていた。すると今も夕日は朱盆しゅぼんのように大きく膨れた顔ふくを、水平線の上に浸そうというところだつた。それはいつに変わらぬ平和な入日だつた。旗男には義兄がわざと彼をおどかすためにいつているように思えてしようがなかつた。

——義兄さんは高射砲隊長だから、きっとS国が空襲してくる夢ばかりみているのだろう。——

と、旗男は腹のなかで、義兄を気の毒に思ったのだった。——背の立つところまで来たらしく、先頭の義兄はヌツクと立ちあがると、波を蹴けちらしながら汀なぎさの方へ歩きだした。

怪しい男

「まあ、おそいのねエ……」

汀のところで、女の声がした。姉の露子が一誕生を迎えたばかりの正彦坊やを抱いて迎えに来ていた。義兄はそれを見ると、とびついていった。

「ああ、正坊。お父ちやまと、チビおじ叔父ちやまのお迎えかい。お、よく来たね。オロオロオロオロ、ばア」

旗男も続いて砂地にあがると、照れかくしに正坊のところへ行って、

「オロオロオロオロ、ばア」

とやった。

「じいタン。ばアばア」

正彦坊やは、まわらぬ口を動かしてキヤツキヤツと若い母の腕

の上ではねた。

「さあ旗男君。早いところ行軍を始めようぜ。——分隊前へ……」
国彦中尉はふざけた号令をかけると、正彦坊やを露子の手からうけとり、先頭に立った。浜から義兄の家まではすぐだった。

すっかり打水をした広い庭に面した八畳の間に、立派な食卓が出ていて、子守の清がひとりきよで番をしていた。

「ああ、咽喉のどがかわいた。何よりも西瓜をはやく出せ」

義兄は洗い場で身体からだを洗いながら大声で叫んだ。ホホホと、お勝手の方で姉の露子と子守の清のほがらかに笑う声でした。まったく和やかな光景なごだった。旗男も知らぬ間に自分ひとりで笑っているのに気がついた。

——こんな平和な家庭、こんな平和な国。……それなのに、遠く離れたS国の爆撃機をおそれなければならぬのか。

国彦中尉は浴衣姿ゆかたすがたとなり、正坊を抱いてニコニコしながら座敷へはいつてきた。入れちがいに旗男は、湯殿ゆどのの方に立った。途中台所をとおると、大きな西瓜が、俎まないたの上ののつていた。旗男はのどから手が出そうだった。

風呂槽からザアザアと水をかぶっていると、隣の台所で、清の脅おびえたような声が、ふと、旗男の耳にひびいた。

「……アノ奥さま。いま変な男が、井戸のところをウロウロしているのです。……故紙業のような男で……」

「アラそう？」

「いえ奥さま。それが変なんでございますよ。ジロジロと井戸の方を覗んでいるのでございますよ。……ああ、わかりましたわ。あのひと、井戸の中の西瓜を狙ねらっているのでございますわ。西瓜泥棒……」

「これ、静かにおし……」

西瓜泥棒と聞いて、旗男はソツと硝子戸ガラスドのすきまから外のぞを覗いてみた。なるほど、いるいる。暗いのでよくは分らないが、頬ほをかぶりおかぶり被被をした上に帽子をかぶり、背中にはバナナの空籠あきかごを背負おっている男が、ソロソロ井戸端に近づいてゆく。……

——怪けしからん奴やつだ。……しかし、西瓜ならもう家の中に取りこんであるからお生あいにく憎にくさまだ。ハハンのフフンだ。——

と、旗男はなお眼をはなさないでいると、かの男は、見られているとも知らず、井戸の上に身体をもたせかけると、右手をつとのぼして何か井戸の中へ投げ入れた様子、カチンと硝子が割れるような音が聞えた。一体何を入れたんだらう？

と、とたんにあらあらしく玄関の格子戸こうしどが開いて、

「コラ待て……」

と、飛びだしていったのは国彦中尉。怪漢はギョツと驚いたらしく、まるで猫のように素早く、井戸端の向こうにまわって身を隠した。その素早さが、どうもただの男ではない。

「さあ出てこい。怪しからん奴だ」

と、中尉のどなりつける声。怪漢は、しやがんだままゴソゴソ

やっていたが、何かキラリと光るものを懐中から取出した。ピストルか短刀か？

「あッ危い……」

旗男は義兄を助けるために、なにか手頃てごろの得物がないかと、湯殿の中を見まわした。そのとき眼にうつつたのは、斜ななめに立てかけてある長い旗竿はたざおだった。よし、すこし長すぎるけれど、これを使つて加藤清正の虎退治とゆこう。

「うおーッ、おおみ大身の槍やりだぞオ……」

いきなり湯殿の戸をガラリとあけると、旗男は長い旗竿を、怪漢の隠れている井戸端のうしろへ突きこんだ。

「うわーッ」

それが凶にあたって、怪漢は隠れ場所からピョンと飛びあがった。そしてなおも逃げようとするとところを、旗男はエイエイと懸かげこえ声をして、旗竿の槍を縦じゆうおう横おうにふりまわした。

「しまった！」

と叫んで、怪漢はその場にたおれた。旗竿が向むこう脛すねにあたつたものらしい。

「ウヌ、この奴……」

と、国彦中尉が飛びこんでいって怪漢の上に折重なろうとしたとき、

ダーン……

と一発、凄い銃声がひびいた。その銃声の下に、ウームと苦悶くもん

する人の声。——旗男はハツとその場に立ちすくんだ。

伝染病菌の容器

まだ暮れたばかりの夏の宵のことだった。不意に起つた銃声に、近所の人々は、夕食の箸はしを放りだして、井戸端のところへ集つてきた。

「どうしたんです。強盗ですか」

「あッ、こんなところに、人間がたおれている。誰が殺したんだ」

と、たち騒ぐ人々の声。

「みなさん。静かにして下さい。こいつは僕を撃とうとして、僕に腕をおさえられ、自分で自分を撃つてしまつたんです」

国彦中尉はすこしもあわてた様子もなく、人々に話をして聞かせた。

「こいつは、一体何者なんです？」

「ピストルを持つているなんておかしいね」

人々はおそるおそる死体のまわりをとりまいた。

「……ああ、あなた。血だらけよ。浴衣も……それから手も……」

驚きのあまり、中尉のうしろに呆然ぼうぜんと立っていた露子が、こ

のとき始めて口をひらいた。

「ナニ、血？ 大丈夫だ。おれには怪我はない」

中尉は元気な声で答えた。

「あなた、いま水を汲みみますから、水でお洗いになっては……」

と、露子が井戸の方によろうとすると、

「待て、露子……。しばらく井戸に触ってはならん」

「えッ」

「皆さんも、井戸には触らないでください。その前に、この死んだ男の身体を調べたいのだが……。誰か警官を呼んできて下さい」

国彦中尉は、なぜか井戸をたいへん気にしていた。そこへ剣をガチャつかせて、二人の警官が息せき切って駆けつけてきた。

「さあ、どいたどいた」

国彦中尉は警官を迎えようと、なにか耳うちをした。警官は顔を見合わせて大きくうなずくと、人々を遠くへどかせた上、中尉と三人きりになって、井戸の横に倒れているきたない服装をした男の持物を、懐中電灯の明りで調べだした。人々は遠くから固唾かたずをのんでひかえていた。

と、突然、

「……ああ、あつた。これだッ」

国彦中尉が叫んだ。そして懐中電灯の光でてらしたものは、死人の腹にまいてある幅の広い帯おび革かわであつた。それには猟銃の薬やつき莢ようを並べたように、たくさんのポケットがついていた。し

かし中尉がそのポケットから取り出したものは、猟銃の薬莢では

なく、注射液を入れたような小さい茶色の硝子筒ガラスとうだった。それには小さいレットルが貼はつてあり、赤インキで何か外国語がしたためてあった。

「ほう、コレラ菌ですよ……」

国彦中尉は、警官の鼻の先に、その茶色の硝子筒をさしつけながいった。

「ええツ、コレラ菌！」

警官の顔は見る見るまっさおになつていった。

「そうです。この死んだ男は、敵国のスパイに違いありません。

この直江津の町におそるべきコレラを流行させるために、これを持ちまわって井戸の中に投げこんでいたのです」

「ああ、するとコレラ菌を知らないで飲んでしまった人もあるわけだ。さあ大変……」

警官は驚きのあまりよろよろとした。

「まあ、しつかりして下さい。今からでも、まだ遅くはない。すぐ手を廻まわして、町の人々に生水を飲むなと知らせるのですね」

「どうして知らせたらいいでしょう。こんなことがあるのだつたら、サイレンか何かで『生水を飲むな』という警報が出せるようにきめておけばよかつた」

警官は大きな溜ため息をついた。これを横から聞いていた人々も、全身の血が逆流するように感じた。なにも知らない町の人々は、今も盛んにコレラ菌を飲んでいるのだ。そしてやがてコレラ菌の

ため、ことごとく死に絶えてしまうのではなからうか。なんとうおそろしいことだ。スパイの持ってきた死神の風呂敷に、直江津の町全体が包まれてしまったのだ。

「義兄さん——」

と、旗男少年は列の中からとびだして来た。

「ぐずぐずしていいいで、早く新潟放送局に電話をかけて放送してもらえばいいじゃありませんか。いま午後七時半の講演の時間をやっている頃だから、ラジオを持っていく家には、井戸が使えないことをすぐ知らせられますよ」

「えらいツ……」

中尉と二人の警官とは、声を合わせて、同じことを叫んだ。そ

して三人は旗男の方を一せいにふりかえった。とたんに三人はアツといつて目をむいた。

「うわーッ、旗男君。その恰好かつこうはなんだ。早く家へ入つて猿ざる股たをはいてこんか」

と、国彦中尉が大喝した。それをキツカケに、井戸端からドツと爆笑がまきおこつて、その場の暗い気持をふきとばしてしまつた。——旗男は、すっぱだかなのをすっかり忘れていた。

智者ちしやは惑わず

夜に入ると、直江津のコレラ菌さわぎは、ますますはげしくな
つていった。

新潟放送局では、講演放送を途中で切り、警察署からの臨時官
庁ニュースとして、「コレラ菌の入った井戸水を注意して下さい」
を放送しだしたから、ラジオを聞いていたものは驚いた。

「……当分生水はお飲みにならぬようにねがいます。さしあたり、
井戸の中へ漂さらしこ白粉を一キログラムほどお入れ下さい。……それか
ら既すでに生水をお飲みになった方は、急いで医師の診察をうけられ
るか、それともすぐ梅酢うめずをちよこに二、三杯ずつ飲んで下さい：

……」

コレラになつては大変だ。漬物屋へ徳利とくりをもつて梅酢を買いに走つてゆく男や女。青年団は、倉庫を開いて、漂白粉をバケツに詰めては、エツサエツサと夜の町の井戸を探しにゆく。漂白粉をなげこんだ井戸には、白墨で三角印をつけてゆく。……放送を聞いたとたんに腹が痛くなつたという者もでてきたが、本当の発病は二十四時間ぐらいにでてくるものが多いから、それは気のせいであろう。

とにかく旗男が気をきかしたので、コレラ菌がまかれたことはわりあい早く直江津の町に知れわたつた。ぐずぐずしていると大変なことになるところだつた。

「義兄にいさん。あの西瓜はもう駄目ですな」

と旗男は残念そうにいった。

「ああ、西瓜！ そうだ、あの騒さわぎで忘れていた。オイ西瓜を持つてこおい」

と、奥へ声をかけた。

「まあ、あなた、コレラ騒さわぎに西瓜でございますか」

露子はいきれたというような顔をして、国彦中尉の顔をみつめた。

「なあに、あの西瓜は大丈夫だよ。コレラ菌を入れる前に、上へあげたんだもの。それでも心配だったら、漂白粉を入れた水で、外をよく洗つてもつておいで」

「まあ、あなた、……そんなに食意くいいじ地をおはりになるものではあ

りませんわ」

「ばかをいつちやあいかん。意味なく恐れるのは卑怯者ひきようものか馬鹿者だ。十分注意をはらつて、これなら大丈夫だと自信がついたら、おそれないことだ。僕は自信があるから西瓜を食べる。……旗男君、君はどうするかね」

中尉は笑いながら旗男の顔をみた。たしかに義兄のいうことは本当だ。

「智者は惑わず、勇者は恐れず」という格言がある。意味なくあわてるのでは、大和魂やまとだましいを持つているとはいえない。旗男のはきはきまつた。

「僕、食べますッ！」

「姉さんは頂かないわ」

「ウフン、気の毒なことじゃ。ハツハツハツ」

二人の前に、^{まないた}俎にのつた西瓜が出て来た。国彦中尉は庖^{ほう}丁^{ちよう}をとりあげると、グラグラ沸^わきたつてゐる鉄びんの蓋^{ふた}をとつて中に入れ、やがてそれを出すと、ヤツと西瓜を真二つに切つた。それをまた三つに切つてその一つを両手にもつてガブリとかみついた。

「ああ、うまいうまい。旗男君、どうだ」

旗男は義兄の自信に感心しながら、西瓜の片^{きれ}をとりあげた。そいつはすてきにうまくて、文字どおり頬^ほつぺたが落ちるようだった。

「義兄さん。あのコレラ菌を持っていたのはやはりスパイでしょうか」

「ウン、立派なスパイだ。日本にまぎれこんで、秘密をさぐっては本国へ知らせるスパイもあれば、あんなふうには、日本に対してじかに危害を加えるスパイもある」

「いまのスパイはS国人ですか」

「いや違う。東洋人だったよ。日本人か、他の国の人間か、いまに警察と憲兵隊との協力でわかるだろう。とにかくS国人に使われているやつさ」

「日本人だったら、僕は憤慨ふんがいするなあ。しかしS国というのは悪魔のようなことを平気でやる国ですね」

「これまでの戦争は、本国から遠く離れた戦場で、軍隊同士が戦うだけでよかった。しかしこれからの戦争は、軍隊も人民も、ともに戦闘員だ。そして戦場は、遠く離れた大陸や太平洋上だけにあるのではなく、君たちが住んでいる町も村も同じように戦場なんだ。だからあんなふうにスパイが細菌を撒いたり、それから又敵の飛行機が内地深く空襲してきたりする」

「すると僕も戦闘員なんですね」

「そうだとも。立派な戦闘員だ。非戦闘員はというと重い病人と、物心のつかない幼児と、こども足腰も立たないし、耳も、眼も駄目だという老人だけだ。七つの子供だって、サイレンの音がききわけられるなら、防護団の警報班を助けて『空襲空襲』と知らせる力が

ある。大戦争になると、在郷軍人も、ほとんど皆、出征してしま
う。後にのこった人たちの任務は多いのだ。たとえば防空監視かんしし
哨ようといつて、敵の飛行機が飛んでくるのを発見して、それを早
く防空監視隊本部を経て防衛司令部に知らせる役目があるが、こ
の防空監視哨を、視力が弱い者でも立派にやれるんだ」

「まさか、そんなことが……」

「笑い事じゃない、本当だ。いいかね……」

と、国彦中尉が、最後の西瓜の片を持ったとたんに、玄関の格こ
子戸うしどがガラリとあいて、大きな声がとびこんできた。

「……川村中尉どの、お迎えにまいりました」

非常呼集

「おお、沼田の声だ」

国彦中尉は、従卒の声を玄関に聞いて、座からとびあがった。

「中尉どのは、御在宅でありますか」

沼田一等兵は、露子に迎えられて、玄関の前で拳手の敬礼をしていた。

「おい沼田。まだ休暇の時間中だぞ、迎えが早すぎる」

「ああ、中尉どの」

沼田の面はおもてひきしまっていた。

「そうでありませんが、非常呼集の連隊命令であります。サイド・カーをもつてお迎えに参りました」

「ナニ非常呼集……」

中尉はハツとした面おももち持で、露子の顔を見た。露子もハツとしたが、武人の妻だ取乱しもせず奥にかけこんで、軍服の用意にかかった。

「義兄さん、お出かけですか」

「ウン旗男君。これはひよつとすると、今夜あたりから、物騒なことになるかも知れんぞ」

「物騒って、これ以上に物騒という……アーもしや空襲でも」

「そうだ。なんともいえんが、S国の爆撃機が行動を起したのかもしれない。早ければ、ここ二、三時間のうちに敵機がやってくるかもしれない」

「ええッ、本当ですか。たった二、三時間のうちに……」

「距離が遠いといっても、〇〇〇〇から七百五十キロばかりだ。

時速三百キロで、まっすぐにくるなら二時間半しかかからぬ。……とにかく、敵もさる者で、全くの不意打らしいぞ」

敵の飛行隊の根拠地から、二時間半しかかからないと聞くと、さすがに距離の近さがハッキリ頭に入ったような気がした。

川村中尉は、露子の抱いてきた正坊の寝顔を、太い指先でちよつとついでみたがそのまま起しもせず、暗い戸外に出ていった。

西空には、糸のように細い新月が冷たく光っていた。沼田一等兵はもうサイド・カーのエンジンをかけて、中尉の乗るのをいまやおそしと待っていた。

「待たせたなア。……では飛ばしてくれい」

爆々たる音響を残して、サイド・カーは街道を矢のように走りさった。目ざしてゆくのはこの直江津から南へ五キロほどいった高田連隊の高射砲隊だった。

義兄が出てゆくと、間もなくラジオの演芸放送がプツンと切れ、それに代って騒然たる雑音が入って来た。なんだかキンキン反響しているらしい。かすかではあるが、電話にかかっているらしい話声がする。どうやらそれは軍人らしい。活発な声だ、とたんに

爆発するようなアナウンサーの声。……

「ただいま、重大なる事態が起りましたため、マイクロフォンを東部防衛司令部に移して皆様に呼びかけます……」

重大なる事態発生？ 旗男は思わず受信機のダイヤルを音の強い方にひねった。そして隣の部屋を向いて、大声で姉を呼んだ。

「姉さん。たいへんですよ。早くここへ来て、放送をお聞きなさい」

「あら、いよいよ始まったの……」

姉は正坊をソツと寝かしつけて、立ってきた。

拡声器からは、声なじみの中なかうち内アナウンサーの声が一句一句

強くハツキリと流れてくる……。

「まず第一に、香取防衛司令官の告諭こくゆであります。司令官閣下を御紹介いたします」

しばらく間があつて、やがて軍人らしい莊重な声がひびいてきた。――

「本日午後八時、全国に防空令がくだされました。その目的は、S国の強力なる空軍が、わが帝国領土内に侵入を開始したのに対し、適宜てきぎの防衛を行うためであります。皇軍の各部隊は既にそれぞれ勇猛果敢かかんなる行動を起しました。銃後にある忠勇なる国民諸君も、十分沈着元気に協力一致せられて、防護に警備に、はたまたその業につくされ、もつて暴戻ぼうれいなる外国S国軍の反撃に奮励していただきたい。昭和十×年七月二十五日。東部防衛司令官陸

軍中将香取龍太郎」

S 国空軍！ いよいよやって来たか、世界第一を誇るその悪魔隊、……しかし香取司令官の声には何物をもおそれないような、決意と自信とがこもっていた。

「……つづいて、東部防衛司令部の重大な発表がありますから、そのままお待ち下さい。……ああ、お待たせいたしました。東部防衛司令部発表第一号。ただいま、能登半島より、大井川おおいがわに至る線より東の地域は、警戒警報が発令されました。直ちに警戒管制でございます。不用な灯火は消し、他の必要なる灯火は、屋外に灯がもれぬよう黒い被おおいをかけて下さい……」

いよいよ警戒警報が出たのだ。今夜のは防空演習ではない。

放送とともに、戸外がにわかになぞうしくなった。青年団員や在郷軍人が、活発な行動を起したものらしい。自転車のベルが、しきりと鳴りひびくのが、旗男の耳にのこった。

高射砲陣地

高田の歩兵第三十連隊の本隊は、日本海を越えて其方面に出征していた。あとには留守部隊がのこっていたが、これには臨時に、三箇中隊この高射砲隊が配属されていた。

川村国彦中尉は、その第三中隊長だった。敵機をうち落とす高射砲、プロペラの音によつて、敵機的位置をさがす聴音機、空を昼間のようにあかるくパツと照らす照空灯などが、この中隊に附属していた。それらは川村中尉の自慢のたねだった。兵員と機械とがまるで一人の人間の手足のように、うまく動くのであったから。営門をくぐるのも遅しとばかり、中尉はサイド・カーから下りた。そして、いそぎ足で、連隊長の室に入った。

「おお、川村中尉か」

留守連隊長の牧^{まき}山^{やま}大佐は椅子^{いす}から立ちあがった。

「せっかくの休暇が台なしになったのう。……さあ、そこで連隊命令を伝える」

川村中尉は不動の姿勢で、連隊長の命令書を読むのをまつた。

「第○野戦高射砲隊ハ、既定計画ニ基キ陣地ヲ占領シ主トシテ高田市附近ノ防空ニ任ゼントス。各中隊は速力ニ出発シ、第一中隊ハ鴨島ニ、第二中隊ハ柳島ニ、第三中隊ハ板倉橋附近ニ、陣地ヲ占領スベシ。終」

いよいよ出動命令が発せられたのである。川村中尉は、固い決心を太い眉まゆにあらわして、おごそかに挙手の敬礼をした。そして廻れ右をすると、活発な足どりで連隊長の室を出ていった。

「高射砲第三中隊あつまれ！」

中尉の号令を待ちかねていたかのように、部隊はサツと小暗いおくら営庭に整列した。点呼もすんだ。すべてよろしい。そこで直ちに

部隊は隊伍をととのえて、しゆくしゆくで行進をはじめた。

市街を南へぬけて左へ曲ると、そこは板倉橋だった。——中隊は橋を中心として左右に散って陣地をつくった。——聴音機の大ラツパは暗黒の空に向けられ、ユラリユラリと重そうな頭をふつた。敵機の来る方向はいずこだろうか？

不気味な夜は、音もなく更けていった。

午後九時になると、とうとう非常管制が布かれた。サイレンの唸うなり、ラジオの拡声器から流れてくるアナウンサーの声。「空襲、空襲！」と叫びながら走ってゆく防護団の少年。「灯火あかりをかくして下さあい！」と消し忘れた家の戸を叩たたくけたたましい音。……そんなものがゴツチャになって、町や村は必死の非常管制ぶりだ。

午後九時半、〇〇海に出動していた第四艦隊から報告が来た。

「艦隊八午後九時二十分北緯四十度東経百三十七度ノ洋上ニ於テ、
高度約二千米ヲ保チ、南東ニ飛行中ノ敵超重爆撃機四機ヲ発見セ
リ、直チニ艦上機ヲ以テ急追攻撃セシメタルモ、天暗ク敵影ヲ逸
スルオソレアリ」

これで敵機の強さがわかった。やはりS国が世界に誇る超重爆
撃機をもつて攻めてきたのだ。それは、一台にすくなくとも五ト
ンの爆弾を積んでいるはずだ。爆弾にもいろいろあるが一トンの
破甲弾はこうだんなら、十階の鉄筋コンクリートのビルディングも、屋上
から一階まで抜けてメチャメチャになる。しかし敵機の持つてく
るのは大部分が焼夷弾しょういだんであろう。これには一キロ以下のや二十

キ口位のやいろいろある。落ちて来るとたちまち三千度の熱を出し、鉄でもなんでもトロトロに焼き熔かしてしまふのだ。この焼夷弾をドンドン落して、日本の燃えやすい市街を焼きはらつてやろうというのが、敵の作戦なのだ。

また、なかには恐ろしい毒瓦斯弾どくガスだんも交っているかも知れない。その毒瓦斯にもいろいろある。

それをまかれると、やたらにクシャミがでて、しまいには頭痛おうと嘔吐おうとになやむジフェニール、クロールアルシンなど、また涙がポロポロ出てきて、眼があげられず、胸が痛みだすというピクリン瓦斯。また嗅かげば肺臓がはれだし、息がとまって死ぬようなことになるホスゲン瓦斯、もつとひどいのはイペリット瓦斯で、身体

に触れるとひどくただれ、大きな水ぶくれができ、だんだん目や肺や胃腸をわるくしてゆくという恐ろしいものだ。その外にもまだ秘密にしている新毒瓦斯があるというから、それも持ってきて撒くにちがいない。——ああ、地獄の世界は、見まいとしても、もう一時間か二時間のうちに、見られるのではないか。われらの準備はできているかしら。……

突如、高射砲陣地に、連隊からの警報電話が入ってきた。

「第四艦隊発警報。——敵ノ超重爆撃機二機ヲ、遂ニ南方ニ見失エリ。他ノ一機ハ高角砲ニヨリ粉砕シ、他ノ一機ハ海中ニ墜落セシメタリ。本艦隊モ駆逐艦一隻損傷ヲ受ケタリ」

「超重爆撃機二機ヲ南方ニ見失エリ」——ああ、それではいよいよ

よやって来るぞ。

おお、憎むべき空魔！

その空魔は、いまや刻一刻、わが海岸に近づきつつある。……

深夜の空襲

ピカリ——

と、暗黒の空に、真青な太い柱がとびあがった。

照空灯だ！

太い光の柱は、生物のようにぐうつと動きながら、夜の空をかきまわした。それにぶつちがいに、また地上から別の照空灯の光がサーツと閃いた。ひらめどつちも、同じような場所を探している。——とたんに、いいあわしたように、光の柱はパーツと消えた。あたりは再び闇となった。しかし照空灯の強い光の帯だけが、いつまでもアリアリと眼の中に残っていた。どつちもかなり遠方で、方角からいうと、直江津よりもだいぶん東の方だ。海岸に陣地をしいている部隊が敵機を探しているのらしい。

川村中尉は、聴音機の上にとびのつて、聴音手のそばにピツタリ身体をよせていた。さつきまで首をふっていた大きな聴音ラツパは、今は天の一角をさしてすこしも動かない。——ついに敵機

の爆音をとらえたらしい。

ヒラリと中尉は地上にとび下りる。

ピリピリピリピリ。

注意せよ？——というしらせだ。

「……各個に対空射撃用意ッ！」

だが、高射砲はまだ沈黙して、ウンともスンともいわない。

そのときゴウゴウゴウと、天の一角から、底ぢからのある聞き

なれない怪音がひびいてきた。——すわッ！ 敵機近づく！

その刹那せつなだった。

サーツと、白竜のように、天に沖ちゆうした光の大柱！ それが、や

や北寄りの空に三、四条、サーツと交叉こうさした。

とたんに、空中に白墨でかいたようにまつ白に塗られた怪影があらわれたのだった。——兵はブルンと慄ふるえた。恐ろしいからではない。待ちに待った敵機をついにとらえたからだ。なんとも奇怪なS国超重爆撃機の形！

ドドドドーン。

ダダダダーン。グワーン、グワーン。

照準手が合図を送ると、砲手が一ヒ二フ三ミと数えて満身の力をこめて引金を引いたのだった。

ズズーン。

グワーン、バラバラバラバラ。

天空高く、一千メートルとおぼしき高度のところに、ピカピカ

ピカピカと、砲弾が炸裂さくれつして、まるで花火のようだ。

だが敵機は、照空灯を全身に浴びたまま、ゆうゆうと砲弾の間を飛んでいる。

「ウヌ、ちよこ才な……」

高射砲にはすぐに新しい七十ミリの砲弾がつめかえられ、砲手はずばやく引金を引いた。砲弾は、ポンポンと矢つぎばやに高空で炸裂する。しかし敵機は憎らしいほど落ちついている。——そればかりか、機体の腹のところについていた縞しまが崩れて、なにか白いものがスーッと落ちてきた。

「あッ、やったぞ、爆弾投下だッ……」

誰かが大声で叫んだ。

白い爆弾の群は、斜に大きな曲線をえがいて落ちてくる。……
一秒、二秒、三秒……。

ヒューツ、ウーンという不気味な唸うなり音をきいたかと思つたその瞬間、

グワ、グワ、グワーン。

ドドドドーン。

ガン、ガン、ガン、ガン。

目がくらむような大閃光だいせんこうとともに、大地が海のようにゆらいだ。ものすごい大爆発！ まぢかもまぢか、聴音機の大ラツパがたちまちもげて火柱の間を縫ぬうように吹きとんでゆく。それをチラリと見たが……。

「ウーン。ば、万歳！」

悲痛なさけびごえ。

それにしても、ものすごい狙^{ねらい}だ。わが部隊をぶつつぶそうとてか、破甲弾をなげおとしたのだった。

「……照準第一、あわてるなッ」

どこからか、川村中隊長のさけぶ声が響いてきた。

「中隊長どの、平氣の平左であります……」

タダダダーン。シューツ。ダダダダーン。

勇猛なる兵は、手足をもがれても、部署から離れぬ。砲弾は、

照空灯の光の柱をおいつづける。もう一弾！

それ、もう一弾！

ピカピカピカと、空中に奇妙な閃光が起ると見る間に、ぶるンと異様な空気の震動——とたんにパツと咲いた真赤な炎！ あツという間もなくメラメラと燃えひろがり、クルクルクルとまわりだした。

「うん、命中だ。敵機は墜落するぞう！」

「バ、バンザイ」

敵機は、すっかり炎につつまれて、舞いおちる。……

「……さあ、残るはもう一機だツ。もう一がんばりだ。はやく探しあてるんだ」

伸びくる毒の爪

それまで直江津の町は、幸いにも、夜襲機の爆撃からまぬかれ
ていた。

旗男は、不安な面持で、高田市方面と思われる方角の空と地上
との闘いをみつめていた。空中に乱舞する照空灯、その間に交っ
て破裂する投下爆弾、メラメラと燃えあがる火の手、遠くからな
がめても恐ろしい焼夷弾の力！

「あれが、この町の上に降ってきたんだったら、今ごろは冷たい
屍しかばねになっているかもしれない……」

町いつたいは、もうしぶん申分のない非常管制ぶりだった。直江津の

全町は、まったく闇の中に沈んでいた。旗男は、この町の防空訓練のゆきとどいていることに感心していた。

そのとき、けたたましくはんしょう半鐘が鳴りだした。

「オヤツ……」

と思つて、ふりかえつてみると、火事だ。近くの国分寺の方角だ。

「オヤオヤ、変だぞ」

火事は一箇所と思いのほか、町の南にあたる安国寺の方角にも起つている。そこへもう一つ、東の方に現れた——黒井の窠ちっそ素会社の方角だ。——爆弾もなにも降つてこないのに、一時に三箇所

の火事だなんて、どうもおかしい！ と、思っていると、少年が二人ほど自転車にのって通りかかった。彼等は声を合わせてどなつてゆく……。

「火の用心！ 火の用心！ 皆さん火に気をつけて下さい。一軒から必ず一人ずつ出て警戒していて下さいよう。いまの三箇所の出火は、どうもこれもS国のスパイがやった仕事ですよう」

「ナニ、S国のスパイ」

スパイは、だにのようにしつこく、この直江津の町に食いついているのだった。なぜ、この小さい港町が、スパイにねらわれるのだろう。同時に三箇所から起った火事というのも不思議だったが、やがて町の人には、そのわけがわかるときが来た。それは突

然、音もなく町の上に落下してきた爆弾の雨！

「焼夷弾だッ……」

と気がついたときには、既に遅かった。

いわゆる爆弾とよばれる破甲弾や地雷弾とちがって、あまり大きな破裂音をたてない。だが投下弾は、民家の屋根を貫き、天井をうちぬいて畳の上や机の横に転がり、そこではじめてシユウシユウと、目もくらむような眩しい光をあげて燃えだすのだ。

そしてアレヨアレヨという間に畳も柱もボーツと燃えだした。たちまち室内は一面の火の海となり、なおも隣家の方へ燃えひろがっていった。

まったく手の下しようもない。みるみる火勢はものすごさを加

えていつて、往来へとびだしてみると、もう屋根の上へ真赤な炎が、メラメラと顔をだしていた。早く逃げなければならぬが、この強い火の海にとりまかれてはどちらへ逃げてよいかわからぬ。まったく気をつきようが遅かった。三十秒以内に、落ちた焼夷弾のまわりの畳や襖ふすまや蒲団ふとんなどの燃えやすい家具に、ドンドン水をかけてビショビショに濡ぬらせばよかった。すると焼夷弾がクラクラに燃えさかり、はげしい火の子を吹きだそうと、その火の子の落ちたところが濡れていけば、あたりに燃えひろがる心配はなかったのだ。

焼夷弾の防ぎ方をハッキリ心得ている人が少かったばかりに、焼夷弾を全町にくらった直江津の町には、敵機の注文どおりに一

時にドツと火の手があがった。

行方をくらました一機が直江津の上空にしのびこんだので、スパイは三箇所に火事を起して、直江津の町がここだと敵機に知らせたわけだった。だから焼夷弾は、町の上にちゃんと正しく落ちた。

「姉さん、逃げましょう——」

旗男は火が迫ったのを見て、姉をうながした。このとき姉はゴソゴソ押入を探していた。

「ちよつと、旗男さん。……逃げるにしても防毒面がなければね。もう一つあつたはずだが……ああ、あつた。旗男さん。早くこれをかぶんなさい」

さすがに軍人の家庭は用意がよかった。

旗男は、非常な感激とともに、その防毒面を情ぶかい姉の手からうけとった。

「……旗男さん。あんた、この町にぐずぐずしていちやいけないわ。きつと東京は、もつとひどい空襲をうけていてよ。家はお父さまもお母さまも御病気なんですよ。竹ちゃんや晴ちゃんでは小さくて、こんなときには頼みにはならないわ。こっちは大丈夫だから、あんたは急いで東京へ帰ってよ、ね、お願いするわ」

「ええ……」

旗男もさつきから、そのことを心配していたのだ。早く帰らないと申分ない。もうしわけ

そのとき裏手から、また焼けつくような煙がふきこんできた。

「さア、姉さん、はやく……」

姉と坊やとを押しだすようにして庭へとびおりた。そのとき猛火はもう羽目板に燃えうつっていた。

^{ひさし}廂からといわず、窓からといわず息づまるような黒煙が濛々^{もうもう}

と渦をまいて追ってくる。……旗男は渡された防毒面をかぶろうとしたが、一体、姉たちの用意はいいのかしらと心配になつて、後をふりかえつた。

「おお……」

旗男は、姉とその愛児の正坊とが、それぞれの頭にピツタリ合つた防毒面をかぶっているのを見て感心した。——そこで旗男も

あわててスポリとかぶった。煙がその吸収缶に吸われて、とたんに息がらくになった。姉たちは、その間に旗男のそばをぬけて、スルリと門外にとびだした。

真向こうの大きな二階建の家には、焼夷弾が落ち、階下で燃えだしたと見え、家ぜんたいが、まるでしかけ花火のような真赤な炎に包まれていた。すさまじい火勢が、家ぜんたいをグラグラとゆすぶった。旗男はハツと立ちすくんだ。

「あッ、姉さん、あぶないッ！」

と、叫んだが……それは残念にも、すでに遅かった。とたんに家はものすごい大音響をあげて、ドツと道路の上に崩れおちてきた。——ああ、いましも正坊を抱いた姉が駆け出したばかりのそ

の道路の上に……。

避難民

どこをどう逃げてきたか、よくわからなかった。とにかく気をついたときには、旗男は、まっくらな畦あぜみち道をまるで犬かなんかのように四ンばいになり、ハアハア息を切りながら先を急いでいる自分自身を見出みいだした。

（なぜ、僕はこんなに急いでいるのだろうか？）

そういう疑いが、ふと彼の頭のなかを掠かすめたとき、彼はとつぜん気がついた。今まで何をしていたのか、ハッキリはしないけれど、とにかく、焼け落ちた家の下じきになったはずの姉と正坊の名を、あらんかぎりの声をしぼって呼びまわっている時、救護団の人たちが駈けつけたこと、そのうち逃げてくる人波に押しへだてられてしまったことだけが残っていた。それから先、どうして逃げたかわからない。

どうやらあまりの惨事に、しばらく気が変になっていたものらしい。

（ああ、姉さんや正坊はどうしたろう。これもみな、町のひとたちが、焼夷弾が落ちたらどうすればいいかを知らなかったせいだ。

敵機も恐ろしいには違いないけれど、防護法を知っていたらこんなにはならなかつたであろう？)

旗男は心配と口惜くやしさで、腸はらわたがちぎれるように感じた。

あたりをみまわすと、後にしてきた直江津の町は、まだ炎々と燃えさかっていた。しかし、さつきまでは活発に聞えていた高射砲のひびきは今は聞えない。僅わずかに高田市あたりと思われる遠空に、たった一本の照空灯がピカリピカリと揺れているばかりだった。——どうやら敵機はさつたらしい。だが非常管制はそのまま続けられているらしい。

「元氣を出さなきやあ……」

と、旗男は自分自身にいいきかせた。そして、四ンばいをよし

て、二本の足で立ちあがった。

畦道がおしまいになつて、暗いながらも、火炎の明るさでそれとわかる街道へ出てきた。

(これでやつと歩きよくなる——)

と思つて、彼は悦よろこびながら、街道を歩きだしたが、わずか十メートルほどゆくと、道路の上に倒れている人間にドーンとぶつかった。

(オヤ、どうしたんだらう?)

旗男はこわごわ傍そばへよつてみた。道路の上に倒れている人数は、一人や二人ではなかつた。誰もみな、身体をつっぱらして死んでいた。そして、いいあわせたように、両手で咽喉のどのあたりを掴つかん

でいた。

「ああ、敵機はやつぱり毒瓦斯を撒まきちらしていったんだ」

旗男も、姉から防毒面を貰もらわなかつたら、この路傍にころがっている連中と同じように、今ごろは冷たく固くなっていたことだろう。

それにしても、なんとという憎むべき敵！

ふり落ちる涙をおさえおさえ、旗男はようやく街道に出ることができた。そこで彼は、たいへんおびただ夥しい避難者の列にぶつかってしまった。狭い路上には、どこから持ちだしてきたのか車にぎしりと積んだ荷物が、あとからあとへと続いていた。その車と車との間に、避難民が両方から挟はさみつけられて、キュウキュウいっ

ていた。それも一方へ進んでいるうちはよかつたけれど、そのうちに誰かが流言を放つたらしく、先頭がワーツというと、われさきに引きかえしはじめた。とたんに、どこから飛んできたのか火の子が、荷物の上でパツと燃えだしたので、さわぎは更にひどくなつた。

「オイ、女子供がいるんだ……押しちや、怪我する。あれこの人は……」

「さあ、逃げないと生命がたいへんだ。どけ、どかぬか……」

「うわーッ」

蜂の巣はちすをついたようなさわぎになつた。そうさわぎだしては、

助かるものも、助からない。群衆は、ただわけもなくあわて、わ

けもなく争い、真暗な街道には、あさましくも同士うちの惨死者が刻々ふえていった。

「あわてちやいかん」

「流言にまどうな。落着けッ！」

声をからして叫ぶ人があつても、いったん騒ぎだした人たちを鎮^{しず}める力はなかつた。日本国民として、この上もなく恥^{はず}かしい殺人が、十人、二十人、三十人と、数を増していった。ああ、このむごたらしい有様！これが昼間でなかつたのが、まだしもの幸いだつた。あわてた人間には大和魂なんて無くなつてしまふものなのか？

旗男は、命からがら、この殺人境からのがれ出た。いくたびか

転びつつ前進してゆくほどに、やがて新しい道路に出たと思つたら、いきなり前面に、ピリピリピリと警笛が鳴つたので、おどろいて立ちどまった。

「さあ、いま笛の鳴っている方角に歩いて下さい。この方角は駅の前へ出ます。……さあ、皆さん元気で、頑張つて下さい。祖国のために……」

群衆のざわめく姿が、火事を照り返した空のほの明るさで、それと見られたが、かなり集っている。それなのに、これはさっきの群衆とちがって、なんとという静肅な人たちだろう。落ちついているのと、あわてているのは、こうも違うものかとおどろいた。

旗男は、暗夜の交通整理のおかげで、思いがけなく駅の前に出

ることができた。それは春日山かすがやま駅といって、直江津と高田との中間にある小駅だった。ちようと東京方面へゆく列車が出ようという間ぎわだった。町を守らねばならぬ義務をわすれて逃げだすような人たちは断られたが、旗男のように、東京方面へ帰るわけがある人たちは、プラットホームへ入れてくれた。

旗男は、思いがけないほど都合よく汽車に乗りこむことができた。

——東京はどうだろう？ 病身の両親や、幼い弟ていまい妹などが、恐ろしい空襲をうけて、どんなにおびえているだろうか。

疾走する暗黒列車

空襲をうけたといつて、すぐ交通機関が停とまるようでは、ちやうど、手術にかかったとたんにお医者さまが卒倒したのと同じように、たいへんなことになる。

空襲下でも、交通機関は、できるだけ平常どおり動かさねばならぬ——と、鉄道大臣は、大きな覚悟をいいあらわした。

それは全くむつかしい仕事のうちでも、ことにむつかしい仕事であるのに、鉄道省は、見事にそれをやってのけた。……黒白もわかぬ暗黒の夜に、螢火ほたるびのような信号灯一つをたよりに、列車

でもなんでも、ふだんと変わらぬ速さと変わらぬ時間で運転するなんて、神さまでも、ちよつとやれるとおつしやらないだろう。

——これを実際にやってのけたのだから、日本の鉄道の人たちは天あつぱれ晴なものだった。踏切や町かどの交通整理を引受けて、働いた青年団員も、実に偉かった。

「おどろきましたねエ、まったく……」

と、辻村という商人体の乗客が口を開いた。列車の内はすべて電灯に紫むらさきぎれ布おおいの被おおいがかけられていた。

「国がどうなるかというドタン場に、こうも落ちつきはらって、自分の職場を守りつつづけるなんて、イヤ、どうも日本人という国民はえらいですな」

「いや全く、そのとおりでさあ」

と職工らしいガツチリした身体の男があいづちをうつて答えた。「われわれの先祖が、神武天皇に従って東征にのぼったときからの大和魂ですよ。大和魂は現役軍人だけの持ものじゃない。われわれにだってありますあ」

「われわれにも、チャンとありますかなア。わたしなんかにや、どうも大和魂の持合せが少いで恥ずかしいんですよ……」

といて頭をかいたが、

「どうです、親方。この汽車は今夜中このとおり、よろいど 鎧戸をおろし、まっくらにして走るんですかね」

「いや、いまに非常管制がとけて、警戒管制にかえれば、窓もあ

けられますよ」

「警戒管制になるのはいつでしょうな」

「いまに車掌さんが知らせに來ますよ。それまでは、すこし蒸むしあ暑いつが、我慢しましうや」

「我慢しますが、わしはどうも暑いには……いやどうも弱い日本人だ。……どうです、親方。暑さしのぎに、暗いけれど一つ将棋を一番、やりませんか」

「えッ、将棋！」

親方は太い眉まゆをビクンと動かした。

「この空襲警報の中で将棋ですか。いやおどろいた。あんたも弱い日本人じゃない。おそれいつたる度胸。これア面白い。さしあ

たり用もないから、じゃ生死の境に一番さしましうか。これア面白い。はッはッはッ」

辻村商人氏が、トランクから小さい将棋盤を出してきた。トランクを向かいあつた二人の膝の上に渡し、その上に盤をおいた。そして駒を^{こま}パチパチ並べはじめた。そのときまでの、この車内の光景ときたら、婦人や子供といわず、堂々たる若者たちまでが、本物の爆弾投下のものすごさにおびえて、すっかり度を失つていたので。ある大学生はブルブル慄^{ふる}えながらナムアミダブツを唱え、三人づれの洋装をした女たちは恐怖のあまり、あらぬことを口走っていた。列車の窓から外へ飛び出そうとする母親を子供たちが引留めようと一生けんめいになっていた。まるで動物園の狐のよ

うに車内をあっちへいつたり、こっちへいつたり、ウロウロしている会社員らしい男もあつた。

「ああ呆あきれた。あそこを見なよ。この騒さわぎのなかに呑のんき気な顔をして将棋をさしている奴がいるぜ。ホラ、あそこんどこを見てみる……」

登山がえりらしい学生の一団の中から、頓とんきよう狂きやうな声がひびいた。——「将棋をさしている奴がいる」

その声に、室内の人々はあつとおどろいて、学生の指さす方角を覗きこんだ。

「さて残念！ あいにくと銀がないわい……」

辻村氏は顔を真赤にして、毛のうすい頭からポツポツと湯気を

たてていた。

「あツはツはツ。これア愉快だツ」

学生団がドツと笑いだすと、いままで取り乱していた連中も、我に返つたように、おとなしくなつた。そして、ほつとした色と一緒に元気が浮かびあがつてきた。防毒面をとりもせず、座席の片隅に小さくなつていた旗男少年も、落ちつきと元気を取り戻した一人だつた。そして、将棋さし二人男のほうをつくづくみていたが、急に飛びあがつた。

「ああ、鍛冶屋のおじさんだ、兼吉君のお父さんだツ」

それは旗男の東京の家の崖下に、小さな工場を持っている鍛冶屋の大將鉄造さんだつた。

旗男は「おじさんおじさん」と叫ぶと、いきなり、鉄造のガツチリした胸にとびついた。

「うわーッ」

と、さすがに後備軍曹の肩書を持つ鍛冶屋の大将も、不意うち、防毒面をかぶった変な生物にとびつかれ胆きもをつぶした。膝の上ののっていた将棋盤も、ポーンと宙にはねあがった。いまや王手飛車とりの角を盤面に打ちこもうとしたエビス顔の辻村氏の頭の上に、将棋の駒がバラバラと降ってきた。おどろくまいことか、彼氏の金切声――。

「うわーッ、爆弾にやられたッ……」

どくガス
毒瓦斯地帯

旗男は、思いがけなく親友のお父さんに会って、それこそ地獄で仏さまに会った思おもいだった。鉄造は横に座席をあけてくれた。

「どうも、歩ふが一枚足りない……」

辻村氏は、腰掛の下にはいこんで、なくなった駒をさがしまわっていた。

「ああ、うちの赤ン坊が、手にもって、しゃぶっていましたよ」
そういって、女が、さっきの騒をまるで忘れてしまったような

顔つきで、将棋の駒を返してよこした。車内はすっかり落ちつきを取りかえしていた。呑気な将棋が、救いの神だったのだ。

野尻湖のじりこ近くの田口たぐち駅をすぎた頃、客車のしきりの扉が開いて、車掌がきんちようした顔をして入ってきた。

「エエ、皆さんに申しあげます……」

車内の一同は、すわ、なにごとが起ったかと、車掌の顔を見つめた。

「エエ、ただ今非常管制がとかれて、警戒管制に入りましたが、警報によりますと、これから先に、だいぶ毒瓦斯を撒かれたところがあるようでございます。殊ことに一時間程のちに通過いたします長野市附近まわの如ごときは、窒素性のホスゲン瓦斯を落されたというこ

とでありました。そういうわけで、この列車も、毒瓦斯が車内に入ってくるのを防ぎますため、車窓も換気窓も、それから出入口の扉も絶対にお開けにならぬように願います。もちろんよろいど鑑戸の外には硝子戸ガラスどを閉めていただきます。それから扉の隙間などには、めぼり眼張をしていただきます。眼張の材料が十分でございませんので、一つ皆さんで御相談の上、適当にやっております」

これを聞いて、乗客たちは又色を失った。いよいよたいへんなことになった。この列車は毒瓦斯の中を通ることになったのだ。

「車掌さん、防毒面は貸してくれないのですか」

学生団から不安にみちた声がした。

「どうも配給がありませんので……」

「オイ車掌君。金はいくらでも出す。至急、防毒面を買ってくれ
たまえ」

一人の紳士があたり憚はばからない声をだした。

「お気の毒さままで……。室全体の防毒で、御辛抱ねがいます」

「じゃ君に百円あげる。拝おがむから、ぜひ一つ手に入れてくれたま
え」

紳士は泣きだしそんな顔で紙かみいれ入をだした。

「お断りします」

車掌はキツパリいって、次の車室へドンドン歩いていった。

「おお、その子供くん。君は可愛かわいい子だ」

と、紳士は旗男のところへヨロヨロと近づいた。

「二百円あげるから、その防毒面を売ってくれたまえ。私は肺が悪い、病人だ。ね、売ってくれるだろう。三百円でもいい」

旗男は困ってしまった。すると隣に腰をかけていた鍛冶屋の大將が、旗男をかばうようにしたかと思うと、食いつきそうな顔で紳士をにらみつけた。

「この馬鹿野郎！」

その破鐘われがねのような声に吹きとばされたか、がりがり亡者の紳士は腰掛の間に尻餅しりもちをついた。

それに構わず、鍛冶屋さんはすつと立ちあがった。

「さあ皆さん。毒瓦斯を防ぐとなると、お互さまに知らぬ顔をしていられません。みんなで力を合わせて、この室を早く瓦斯避難

室にしなければなりません。私は東京品川区の五反田ごたんだでは防護団の班長をしています。後備軍曹で、職業は鍛冶屋です……」

飛んだところまで口をすべらせるので、辻村氏があきれて、下から鍛冶屋の大將の服をひっぱった。

「……で、とにかく私が指揮しますが、文句はありませんか」

「委まかせるぞう……、よろしく頼むウ……」

という声がかかって、鉄造は大満足だった。

「じゃ、まず眼張の材料だ。みなさん、使ってもいいだけの紙と布きれと、弁当の残りの飯とを出してください。その顔の長い学生君は紙係、青いネクタイの方は布係、その水兵服の娘さんは弁当飯係。すぐ集めにかかってください」

誰もいやな顔をしなかつた。なにしろ、毒瓦斯だ。ぐずぐずしてはいられない。

材料は集つた。それを手頃の大きさに裂く係ができ、材料を分ける係ができ、そしていよいよ全員が手分てわけをして、眼張作業が始まつた。紙と布とを飯粒で幾重にも隙間に張りかさねるのだつた。例の紳士も、命ぜられて飯粒を盛んにこねまわしていた。この協力のかいあつて、僅か十分たらずで眼張ができあがつた。なお軍曹は毛布とシーツとを集めて出入口の扉よりすこし中へ入つたところ仕切りの幕をつくつた。間違つて出入口が開いても、毒瓦斯はこの幕で一時食いとめられる仕掛にして、そこには学生を二人ずつ、番兵につけた。

彼等はピツケルを、小銃のように持って警備についた。こうして全く安心のできる簡易瓦斯避難室ができあがった。

婦人たちは、いずれもニコニコ顔で、車内をなんべんも見まわした。

列車が、柏かしわばら原駅についたとき、指揮をしていた鍛冶屋の大將は、なにを思ったものか、つと扉をあけて、プラットホームへ下りた。どこへ行ったんだろう？

やがて列車はガタンゴトンと動きだした。しかし鍛冶屋の大將はどうしたのか、車内に姿をあらわさなかった。同室の人たちの顔には不安の色が浮かびあがった。

急造の防毒面

「どうしたんだろうな、われ等の防護団長は……」

と、商人辻村氏が、遂に心配の声をあげた。そのとき出入口の扉が、ガラリと開く音がきこえ、そして、毛布の幕の間から姿をあらわしたのは、案じていた鍛冶屋の大将だった。見れば両手に大きな新聞紙包を抱^{かか}えている。中からゴロゴロ転がり落ちたのを見れば、なんとそれは木炭だった。

「炭なんか持って来て……お前さん、この暑いのに火を起す気か

ネ」

辻村氏の顔を見て、鉄造は首を横にふった。

「牛乳、ビール、サイダーの空壺あきびんを集めてください」

妙な物を注文した。——やがて七、八本の空壺が、鉄造の前に
ならんだ。

炭は女づれのところへ廻され、学生のピツケルを借りて、こま
かく砕くことを命じた。一人の奥さんの指から、ルビーの指環ゆびわが
借りられ、それを使って、硝子壺ガラスびんの下部に小さな傷をつけた。

それから登山隊の連中から蠟燭ろうそくが借りられた。灯をつけると、
硝子壺の傷をあぶった。ピンと壺に割目が入った。壺をグルグ
ル廻してゆくと、しまいに壺の底がきれいに取れた。一同は固睡かたず

をのんで鍛冶屋の大将の手許てもとを見ている。

彼はポケットから綿をつかみだした。炭と綿とは、駅の宿直室から集めてきたのだった。——綿をのばしたのを三枚、抜けた壇底から上の方へ押しこんだ。

「炭をあたたためて水気を無くし、活性炭にすれば一番いいのだが今はそんな余裕もないから……」

といいながら小さくした堅かたずみ炭をドンドン中へつめこんだ。そしてまた底の方をすこしすかせ、綿を三枚ほど重ねて蓋をした。そうしておいて壇底を、使いのこりの布で包み、その上を長い紐ひもで何回もグルグル巻いてしばった。

「さあ、これでいい。——みんな手を分けてこのとおり作るんだ」

辻村氏が、目をクルクルさせ、その炭のつまつた壘を高くさしあげて、

「团长、これは何のまじないだい」

「まじないという奴があるものか。これは防毒面の代用になる防毒壘だ」

「へえ、防毒面の代り？　こんな壘が、どうして代りになるのか、わからないねエ。第一これじゃ、顔にはまらない」

「あたりまえだ。顔にはまるものか。……しかし、こうして壘の口を口にくわえればいい。口で呼吸をするのだ。鼻は針金をこんな風にまげ、こいつで上から挟みつけて、鼻からは呼吸ができないうようにする。こうすれば毒瓦斯は脱脂綿と炭に吸われて口の中

には入ってこない」

「なるほど、こいつは考えたね」

「形は滑稽こっけいだが、これでも猛烈に濃いホスゲン瓦斯の中で正味一時間ぐらい、風に散ってすこし薄くなった瓦斯なら三、四時間ぐらいはもつ。立派な防毒面が手に入らないときは、これで一時はしのげるわけさ……」

「な、なアる……」

そのとき、扉がガラリと開いた。車掌が入ってきて目を輝かせた。

「これはこれは、この部屋は大出来ですね。よくやって下すつた。これなら大丈夫でしょう」

車掌はいく度も室内をみまわしながら、次の車室へ向かった。

それから十分ののち、列車内には毒瓦斯警報が出た。いよいよ恐ろしき毒瓦斯地帯へ、音もなく滑りこんだ。車室内の全員は、さすがに黙って、鼻に全神経をあつめた。

一分、二分、三分……。今にもホスゲン瓦斯の堆肥たいひに似た臭においが鼻をつくかど心配されたが、四分たち、五分たつても、なんの変った臭もして来ず呼吸はふだんと変りなくたいへん楽であった。

(ああ、助かった！)

室内の誰もが、自分の胸のうちで、同じ事を叫んだ。そうだ、助つたのである。みんなは恩人である鍛冶屋の大将の方をふりむいた。かの大将は、急造の防護壕を前に並べて、腕ぐみをし、大

きな鼻を豚のようにブウブウ鳴らしていた。その時だった。後の車室の方で、にわかには、ただならぬざわめきが聞えてきた。続いて、何かドタンドタンと大きな物がぶつたおれるような物音がした。ガタガタガタンと、あわてて扉を引きあける音がして、とたんにヒイヒイと獣けものが泣くような気味の悪い声が近づいて来た。

帝都は間近し

「助けて、た、たすけてえ」

と、ひどくしゃがれた声が……。

室内の人たちは、一せいに入口の方に眼を注いだ。毛布の幕の
聞から、ゴロリと転げこんできたのは、スポーツマンらしい大き
な男だったが、顔色は紙のように白く大きな口をあけてあえぎな
がら、両手でしきりに咽喉のどのところをかきむしっていた。まさし
く、毒瓦斯に中毒していることが一眼でわかった。鍛冶屋の大將
はまっさきに立ちあがって、その男のそばにかけた。

「た、助けてやって、くれたまえ。こ……後車は毒瓦斯がたいへ
ん、だツ……」

とまでいうと、彼ははげしく咳せきいった。

鍛冶屋の大將は、

「よオシ、助けてやるぞ」

と叫ぶなり、一座を見わたして、学生を五人ほど指名した。

「さあ、あの防毒壕をくわえて、助けにゆくんだ」

旗男も、防毒面を被りかぶなおした。

学生たちは、鼻の穴に思い思いの栓せんをした。或者あるものは、消しゴ

ムを切ったものをつめたり、また或者は万年筆のキャップをつつ

こんだり、それから、また或者は一時の間にあわせに、綿栓をこ

しらえ睡つぼでしめして鼻孔に挿した。

そうしておいて、鍛冶屋の大将を手本にして、防毒壕を口にく

わえた。それは奇妙な格好だった。だが誰も笑う者はなかった。

尊い勇士たちの出陣だから……。

後車へ飛びこんでみると、そのむごたらしきは筆紙につくされないほど、ひどかった。とても、ここに書きしるす勇気がない。

どうしてそんなにひどいことになったかというところ、結局、その車室の目張が、言いいわけ訳的におそまつにしてあり、それも力を合わせず、めいめい勝手にやったための失敗だった。彼等は、毒瓦斯をあまりにも馬鹿にしていたのだった。

七勇士は、できるだけ彼等を助けたけれど、結局、すぐ元氣にかえったものはごくわずかだった。多くは、もう胸にひどい炎症が起り、苦悶はひどくなつてゆく一方だった。

壕をくわえた勇士たちが、やがて部屋へ帰つてきて、口から壕を放したときには、皆いいあわせたように顔をしかめ、歯をおさ

えて、口をきく者もなかった。

「どうもつらい防毒面だ……」

やっと一人が口をきいた。他の勇士は、いたみとおかしさとの板ばさみになって、苦しそうに笑った。

「何しろ、我輩が発明したばかりの防毒面だからこたえたんだよ」と鉄造は口の上から歯をもみながらいった。

「皆さん、お互に今後は、せめて直結式の市民用防毒面ぐらいはもっていることにしましょう。あれなら、この五倍ももつ。今くらしいの薄いホスゲンなら五十時間の上、大丈夫だ」

「そいつは、どの位出せば買えるかね」

「安いものですよ。たしか、六、七円だと思ったがね」

「六、七円？ そりや安い。山登を一回やめれば買えるんだ」

「僕は、さつきこのおじさんに教わったように炭と綿とを使って、もつと楽に口につけられるような防毒面を自分で作るよ。断然、その方が安いからな」

「でも、保つ時間が短いよ」

「なアに、換えられるような式にして、三つか四つ炭と綿のた缶を用意しておけばいいじゃないか」

「僕はその上、水中眼鏡をかけて、催涙瓦斯を防げるようにしようかな」

若い人たちの間には、防毒面の座談会が始まった。同室の人たちは、横から熱心にそれを聞いていた。そしてめいめいの心の中

に思った。――

（今度東京へ帰ったら、まっ先に防毒面を手に入れよう……）と。それから間もなく、毒瓦斯地帯を無事に通過することができた。「篠ノ井しのい、篠ノ井……」

と駅夫のよぶ声が聞えてきた。もう毒瓦斯がない証拠だ。窓は明けはなたれた。そこから涼しい、そして林檎りんごのようにおいしい（と感じた）空気がソヨソヨと入ってきて、乗客たちに生き返おもいった思おもいをさせた。

車内の死者と中毒者とは、この篠ノ井でおろした。駅夫の話によると、夥おびただしい毒瓦斯弾のお見舞をうけた長野市附近は、相当ひどいことになったらしかった。そこでも、平へいぜい生の用意が足りな

かつたわけだ。

列車は、また警戒管制の夜の闇のなかにゴトゴト動きだしていった。——安心したのか、それとも活動に疲れたのか、例の勇士をはじめ、車中の人たちは、枕をならべて深い睡ねむりにおちていった。高崎駅を過ぎるころ、夜が明けた。

しかし車中の人たちは、上野駅ちかくなつて、やっと眼を覚ました。

車窓から眺める大東京！

帝都の風景は、見たところ、どこも変つていかなかった。焼夷弾や破甲弾、さては毒瓦斯弾などにやられて、相当ひどい有様になつてゐることだろうという気がしていたが、意外にも帝都は針で

ついたほどの傷も負っていないかった。昨夜、悪戦苦闘した乗客たちは、何だか、まだ夢を見ているのではないかという気がしてならなかった。

だが本当のところ、帝都は昨夜、遂に敵機の空襲を迎えずにすんだのであった。帝都の四周を守る防空飛行隊と、高射砲の偉力とは、ついに敵機の侵入を完全に食いとめることができたのだつた。

しかし、世界第一を誇るS国の大空軍を果していつまでも、完全に食いとめられるものであろうか、どうか。

？
？

東部防衛司令部

東部防衛司令部は、防空令がくだされると、直ちにこうじまち麴町区某町にある地下街にうつった。

それは空中からどんな爆撃を受けても、完全に職務をなしとげられるような十分安心のできる場所であった。そこには近代科学のあらゆるすい粋をあつめて作った通信設備や発電機や弾薬や食糧や戦闘用兵器などがそろっていた。

その日の午前中に、各地からの知らせが集ってきた。東部防衛

司令官香取中將は作戦室の正面に厳然と席をしめ、鹿島参謀長かしま以下、幕僚を大卓テーブル子のまわりにグルリと集め、秘策をねっていた。「……さような次第でありますから……」

と参謀長は報告書を見ながらいった。

「昨夜、S国の空軍が行いました第一回の夜間空襲は、主として〇〇海沿岸の都市に相当の恐怖と被害とを与えましたようであります。遠征してまいった敵の超重爆撃機は、一機をのぞきましてことごとくわが高射砲のために射落されました。その損害は、そうとう大なるものであります」

香取將軍は大きくうなずいた。

「しかるに、S国はその痛手には一向参る様子もなく、千市にあ

らかじめ待機させてあつた超重爆撃機七十機を、〇〇〇〇の北方
ス市に移しました。この目的はもちろん、わが国土内に深く入り
こんで空襲をやるためであります。その飛行場出発はいつにな
りますやら不明と報道されています。とにかく、これが最も恐る
べき相手であります」

香取將軍は、また大きくうなずいた。そして口を開いた。

「又、U国の有名な空軍も、いま〇〇〇〇半島に集つていそう
じやな。S国とU国との世界の二大空軍が握手しそうな様子に、
大分心配しているむきもあるが本官は、それほど憂慮はしていな
い。たとえば、全世界の空軍が一つになつても、戦争となると、お
のずから順序がある」

と、將軍の太い眉がピクリと動いた。

「さつき、C国の局外中立宣言（どちらにもつかぬということ）が一兩日のびるといふ情報が入りました。やはり昨夜の空襲が原因しているものと見えます」

と、高級副官がいった。

「C国の態度はなかなか決まらんだろう。決まらんところがあつた。日本の国がらなのだ。日本が強ければ、日本につこうとするし、日本が弱りかけたとみると、日本を離れようとする。東洋の平和のためには、わが帝国がどうしても強くなければいけないのじゃ」

「閣下のお言葉の通りです、C国はずいぶん優秀な軍用機をもっているのに、はつきりした行動をとれない。S国やU国が飛行根

拠地を貸せといつて迫つても、断るだけの力がないのです。あわれな厄介な国ですな」

「わが陸軍の主力がほとんど〇〇とC国とにでかけているのも、一つはこの弱い国を正しく導いてやって、東洋の平和に手落なからしめるためだ。平和を乱す国などに、むやみに飛行根拠地などを借りられるようなときには、わが国は、代つて物もいつてやらねばならぬ。東洋に於ける帝国の使命は実におに重いのだ」

そのとき、若い大将参謀が、書類をもって入ってきた。

「司令官閣下、昨夜の空襲によつてわが国土のうけましたる被害について御報告いたします」

「ほう、御苦労」

「〇〇海を越えてきました敵の超重爆四機が、攻撃いたしましたのは、大体に於て、本州中部地方の北半分の主要都市でございました。焼夷弾が十トン毒瓦斯弾が四トン、破甲地雷弾が三トンぐらい、他に照明弾、細菌弾などが若干ございますものと推測いたします」

「十七トンの爆弾投下か。——敵ながらよくも撒いたものじゃ」
「軍隊の損害は、戦死は将校一名、下士官兵六名、負傷は将校二名、下士官兵二十二名、飛行機の損害は、戦闘機一機墜落大破、なお偵察機一機は行方不明であります。破壊されたものは高射砲一門、聴音機一台であります。他に照空灯、聴音機等若干の損害を受けましたが、爾^{じご}後の戦闘には、支障なき程度でございます」

「軍隊以外の死傷は」

「死者約七十名、重傷者約二百名、生死不明者約千名であります。この原因はおもに混乱によるもので、大部分は避難中、度を失った群衆のようであります」

「ウン、恐るべきは爆弾でもなく毒瓦斯でもない。最も恐ろしいのは、かるがるしく流言蜚語りゆうげんひご（根のないうわさ）を信じ、あわてふためいて騒ぎまわることだ。国民はもつと冷静にして落ちつくべきである」

「はッ、閣下の仰せの通りであります。……お圧しつぶされて死んだ者について、死者の多かったのは毒瓦斯にやられた者で、約二十名。これはふだんから、毒瓦斯とはどんなものか、どうすれば

防ぐことができるかをよく心得ておかなかつたためだと存じます

……」

そのとき、通信係の曹長が、いそぎ足で部屋に入ってきた。

「お話中でございますが、司令官閣下、只^{ただいま}今、T三号の受信機

に至急呼出信号を感じました。秘密第十区からの司令官宛^{あて}の秘密

電話であります」

警報出づ

その日の午後四時、真夏の太陽はガラガラと輝いていたが、帝都には突如として警戒警報が発令された。

品川区五反田に、ささやかな工場を持つ鍛冶屋かじやの大将こと金谷鉄造は、親類の不幸を見舞いにいった帰り、思いがけぬひどい目にあつたが、その疲つかれを休めるいとまもなく、もう仕事場に出て、荷車の鉄輪を真赤にやいて、金敷の上でカーンカーンと叩いていた。そこへ防護団本部から急ぎの使がやってきて、「至急集合！」を知らせてきたので、仕事はあともう一息だったけれど、そのまま鎚つちをなげだして、団服を着るのももどかしく、往来へ走りだした。「やあ鉄造さん。よく帰ってきてくれたね」

と、分団長の丸福酒店の主人、神崎かみざき後備中尉は、嬉うれしそうに、

鉄造の手をとった。

「おお、分団長。……昨夜は汽車のなかで、どんなに気をもんだか知れやしない。なにしろ、ふだんの防空演習と違って、いつも先に立って働いてくれた在郷軍人の連中の大部分が、戦地へ召集されて出ていつている。残るは、わし等のような老ぼれと、少年達とばかりだ、それじゃ、とても手が足りなくて困っているだろうと思つたよ」

「ウン、そのとおりだ。全く弱っている。いまラジオでも聞いただろうが、突然また警戒警報が出た。ところが、この小人数になつた防護団では、とても手が廻りやしないことがわかつている」

「一体、人員はどのくらいに減つたのかい」

「とても話にならぬ。半分ぐらいに減っちゃったんだよ。その上、頼みになるような若者達がいないと来ている。……これだけで、警護に、警報に、防火に、交通整理に、防毒に……といったところだ、とても、やりきれやしない。まさか、こんなに防護団が貧弱になろうとは思わなかったよ」

神崎分団長は、心配の眉をひそめ、途方にくれたという顔かおつき附で鉄造の方を見た。

「仕方がないよ。防護団も、戦時にはこうなることが初からわかっていたのだ。愚痴ぐちをならべたって仕方がない。とにかく御国のために、ぜひ完全に防護してみせなきゃならない。困っているのは、この五反田防護団だけじゃない。日本全国で、みなこの通り

手が足りなくて困っているのだ。……よし、俺^{おれ}たちは二倍の力を出すことにしよう。そうすれば、どうにかなるよ」

「他の防護団へ交渉してみようか」

「駄目駄目。それよりも、この際、少年達に大いに働いてもらう方がいい」

「少年達なんて、爆弾がドカーンと鳴るのを聞いたとたん^{とたん}に腰をぬかしたり、泣きだしたりするだろう」

「なんのなんの、そんなことはない。日本の少年の強いことは、^{よりとも}頼朝の胆力、^{くまわかまる}阿新丸の

冒険力、五郎十郎の忍耐力など日本少年は決して弱虫ではない。ところが、この頃では子供だ、かわいそうだと、ただ訳もなくか

わいそうがるから、子供たちは昔の少年勇士のような、勇ましい働きを見せましようと思つても、見せる時がないのだ。今も昔もかわりはない。日本少年の胆力は、今もタンクのように大きい！」

「タンクのように？」

分団長は、鍛冶屋の大將の大袈裟おおげさない方におどろいて顔を見た。

「そうだ。タンクだ。だからこの際、少年たちに重大な任務を与えるのがいいのだ。きっと彼等は、頼朝や阿新丸や五郎十郎などのように、困難を乗り越きつて手柄をたてるよ。心配はいらないぞ、分団長！」

神崎分団長は、鉄造の言葉にすっかり感動してしまつて、強い

握手をもとめた。

「ああ、よく教えてくれた。やはり日露戦役に金鷄勲章きんしくんしょうをも
らつてきただけあつて、鍛冶屋上等兵はえらいツ！」

「オイオイ、上等兵なんかじゃないぞ、軍曹だぜ！」

「ああ、そうかい。軍曹かい。これは失敬。もつとも、のらくろ
二等兵なんかこのごろ、少尉に任官したそうだからね。まして
や君なんか人間で……」

「こらッ！」

大分ヨボついているが、この後備軍人たちも相当なものだった。
これから世界一を誇るS国空軍の強襲をうけようという場合にもか
かわらず、平然と、いつものような冗談をいいあうほど、くそ

おちつきに落着いていた。

神崎分団長は、そこで肚はらをきめて、命令を発した。少年達を召集して、警護、警報、交通整理、避難所管理の各班に分属させること、救護班、防火班、防毒班、工作班は大人がやること……、これでやっと分団長の気は楽になった。

「オウ、分団長はいますかア……」

と、自転車で駆けつけてきたのは、警報班長の髪床屋かみどこやの清せいさんだった。

「分団長は、ここだここだ。清さん清さん」

声を聞きつけて、清さんは、青い顔を天幕テントのなかに入れた。

「あのウ、これは大きな声でいえないことだけれど、実は、いま

新宿駅のそばを通ってきたんですがね、駅のところは黒山の人な
んで……」

「黒山の人？　喧嘩^{けんか}か、流言か」

「まア流言の部類でしょうね。その群衆はてんでに荷物をもって、
甲州方面へ避難しようというのです。なんでもいよいよ今夜あたり、
帝都は空襲をうけて、震災以上の大火災と人死^{ひとしに}があるとい
うのです。だから、帝都附近は危険だから、甲州の山の中に逃げ
こもうという……」

「ナ、ナ、ナ、ナ、ナンだ。帝都から逃げ出す卑怯者が、そんなに
沢山いるのか。それは日本人か」

と、鍛冶屋の大將は、真赤になって怒りだした。

「それがね。めいめい大きな荷物をしよいこんで、押合いへし合
いなんです。女子供が泣き叫ぶ、わめく、怒鳴る、その物凄いこ
とといったら……」

「憲兵や、警官はいないのか」

「いるんでしょうけれど、とてもあの群衆は抑えきれませんよ。」

……それで思うんですが、避難するなら早くやらないといけない。
ぐずぐずしていると避難民はますますふえてきて、列車に乗れな
くなりますよ。……全く帝都にいるのは危険だ」

「ほう……」

と分団長は驚きの色をあらわし、

「そんなことが始まるかもしれないと思っていたが……」

敵機いよいよ迫る

「貴様は……」

鍛冶屋の大將は憤然として、清さんの胸ぐらをとった。

「キ、貴様は逃げる気か。逃げたいのか。空襲をうけようとする
帝都を捨てて逃げるのか！」

「あツ、苦しいツ、ハハ放せツ。……俺は逃げないが、弱い家族
は逃がしたい……」

「ば、ばかッ！」

鍛冶屋の大將は、清さん突きとばした。彼はヨロヨロとなり椅子いすにつきあたると、ドーンとひっくりかえった。

「こーれ、よく聞け」

鉄造は一步前に出て悲痛な声をはりあげ、

「貴様はそれでも、天皇陛下の赤子せきしかッ！　大和民族かッ、五反

田防護団員なのかッ！　恥を知れッ」

まアまアと分団長が入ったが、鉄造はそれをふり払いまた一步前進した。

「忠勇なる帝都市民は、たとえ世界一の空軍の空襲をうけて、爆弾の雨をうけようが、焼夷弾の火の海に責められようが、帝都を

捨てて逃げだそうなどとは思っていないぞ。こんどの国難においては、われわれ市民も立派な戦闘員なんだということがわからんか。考えてもみろ、貴様の家では、家族がみな逃げちまって空家あきやになっているとする。そこへ敵の投下した焼夷弾が、屋根をうちぬいて家の中に落ちてきた。さあ、この焼夷弾の始末は誰がするのだ。おい、返事をしろ」

「……」

清さんは、赤くなって下を向いたきりだ。

「焼夷弾は、落ちて三十秒以内に始末しなかつたら、火事になることはわかっている。空襲下で火事を出すのが、どんなに恐ろしおそいことか思っても見ろ。貴様の家の火事がわれわれの努力を水の

泡にして、この五反田の町を焼き、帝都を灰にしてしまう。それでも貴様は日本人か。貴、貴様というやつは……」

「ワ、わかった、鉄さん。お、おれが悪かった」

清さんは、膝で歩きながら、鍛冶屋の大將にすがりついた。

「鉄さん、おれたちは日本人たることを忘れていた。……どんな爆弾が降って来ようと、自分の家を守る。この町を守る……どうか勘弁してくれ」

「そうれみろ。貴様だつてわかるんじゃないか。わかれば何もいわない。……警報班長なんて委まかせておけないと思つたが、もう大丈夫だろうな」

「ウン、大丈夫！　ウンと活動するぞ、おれは外で働き、家の方

は女房を防護主任にしてやらせる」

「鉄さんのおかげで、わが防護団は俄然がぜん強くなった。さあ、二人で握手しろ」

分団長は、二人の手をとつてにぎらせた。

「あツはツはツ」

「大いにやるツ。ハツハツハツハツ」

日没とともに、警報班の灯火管制係の活動は、目に見えて活発になってきた。なかでも鍛冶屋の大將の息子で、いつも少年ながら父親の向むこう鉚づちをうっている兼かね吉きちは、親ゆずりの忠君愛国の精神にもえ、少年団の先頭にたつて、西へ東へと、教えられた通り、定められた街灯を消してまわっていた。少年たちは五人一組

となっていたが、持ちものは、長い梯子はしごが一つと、高いところに届く竿が二本——それは、先のところが三つまたに割れ、その先を繻ほつたい帯でグルグル巻いてあった。その三つまたを街灯の電球へおしつけ、竿を左まわりにねじると、電球がソケットからすこし抜けてもどるため、あかりが消える仕掛だった。

少年たちが、この作業のときに一番気がついたことは、共同の力の大きいということだった。

昔、毛利もうりもと元就もとなりは三本の矢を一度に折ることのむつかしいことから、協力の大事なことを説いたが、いま少年たちは、五人で力を合わせさえすれば、大人がやつとかつげるような重い梯子もらくらくと運べ、大人がやるよりも、遥はるかに多くの街灯をはるかに

はやく消してあるくことのできるのを知ったのだ。

帝都にはまったく夜のとぼりが下りた。

そば屋の掛看板にも灯が消えた。町のネオン・サインもついていない。自動車のヘッドライトには、紫と黒との二重の布がかぶせられた。飛行将校の話によると、夜間飛行でもかなり低空にくだつてくると、地上で吸っているタバコの火がハッキリと見えることさえあるそうだ。懐中電灯にも、被^{おおい}がある。上から直接見える火は、ことに用心しないといけない。

午後八時十五分！ 突如として、ラジオが鳴りだした。

「東部防衛司令部です。只今警報が発せられる模様であります：

…」

昨日から、中内アナウンサーは、おおわらわの奮闘だった。五百万の市民は、このなじみ深いアナウンサーが、いま何を告げようとするのかと、胸おどらせながら、拡声器の前に集ってきた。

「これア、いよいよS国の超重爆が攻めてきたんですよ」

「さあ、これは大変だ。うちじや防毒室の眼張の糊のりがまだかわいていないので」

「なぜ、もっと早くこしらえなかつたんだい」

「それが、あわてているものだから、糊を作ろうと思って、鍋なべを火にかけてはこがし、かけてはこがし、とうとう三べんやり直した」

「それで、今度は出来たかい」

「ところが、やっぱり駄目、仕方がないから冷飯を手でベタベタ塗ったんだが、つばきがついているせいか、なかなかかわかない。あツはツはツ」

「こらッ、警報が出るんじゃないか。シート」

不気味な沈黙が、ヒシヒシと市民の胸をしめつけていった。

「……警報！ 警報！ 只今関東地方一帯に空襲警報が発せられました。直ちに非常管制に入って下さい。……復ふくしょう誦じゆいたします。只今……」

そのとき、サイレンが、ブーツ、ブーツと間隔をおいて鳴りだした。これに習うように、工場の汽笛がけたましく鳴りだした。

五反田防護団では、警報班長の清さんが、天幕テントの中で、大声に

叫んでいる。

「警報班のみんな。空襲警報だッ。直ちに受持区域に『空襲！』と知らせて廻れ、出動、始め！」

と、妙な号令のかけかたをした。

天幕の前にメガホンをもって並んでいる少年が二十人。半数は自転車で、他の半数は二本の足で、今にも飛出すばかりに身構えていたのだ。班員はサツと挙手の敬礼をすると、

「さあ、行こう！」

と叫んで、それぞれの受持区域にむかって、砲弾のように駆けだした。

防空飛行隊の活躍

志津村の飛行隊は、緊張のてつぺんにあつた。

帝都から、数十キロほどはなれた、この飛行場には、防空飛行隊に属する諸機が、闇のなかに、キチンと鼻をそろえて並んでいた。

今しも三機の偵察機が、白線の滑走路にそい、戦闘機の前をすりぬけるようにして、爆音勇ましく暗やみの夜空に飛びだした。

場外に出ると、三機はそれぞれ機首を別々の方向に向けて、互

に離れていった。前に出発した三機と合わせて、六機の偵察機の使命は、某方面から入った警報にもとづき、敵機を探しに決死の覚悟でとびだしたのだった。

「まだ、その後の報告はないか」

と、屋上の司令所にがんばっている隊長は、通信班長の軍曹にたずねた。

「はッ、まだであります」

「遅いなあ。何もわからぬか」

「はッ、さきほど報告いたしましたとおり、敵機らしきものから打ったあやしい無電をちよつと感じましたが、その方向をつきとめないうちに、怪電波は消えてしまいました。北西の方向らしい

とわかつたきりで、めいりよう明瞭でありませぬ」

「敵機は、よほど用心しているな。相当に高く飛んで来ているように考えられる」

そのとき、通信兵がツカツカと室に入ってきて、一枚の紙片を軍曹に渡した。

「あッ。……ただ今、先発隊の第二号機から通信がありました。」

——『本機二二三〇三地点二達セルモ敵機ヲ発見スルニ至ラズ』
……とあります」

「あッ。……ただ今、先発隊の第二号機から通信がありました。」

——『本機二二三〇三地点二達セルモ敵機ヲ発見スルニ至ラズ』
……とあります」

防空飛行隊が暗夜に必死の活動をつづけている間、帝都では、非常管制をはじめ、あらゆる防護の手段が着々として用意されていった。

五反田の裏うらどおり通では、闇の中に、防護団の少年と住民との間に、小ぜりあいが始まっていた。

「おじさん。どうしても灯を消さないというのなら、僕は電灯をたたきこわしちやうがいいかい」

「そんな乱暴なことをいうやつがあるか。電灯の笠には、チャンとおおいと被おおいがしてあるし、窓には戸もしめてあるよ。外から見えないからいいじゃないか」

「だって、皆が消しているのに、おじさんところだけつけておく

のはいけないよ。敵の飛行機にしらせるようなものじゃないか。

おじさんは非国民だよ」

「なに非国民！ これは聞きずてにならぬ。子供だからと思つて我慢していたが、非国民とはなんだ。おれはこんな貧乏して、ゴム靴の修繕をやり、女房は女房で軍手の賃仕事をしているが、これでも立派に日本国民だツ。まじめに働いているのがなぜ悪いんだ。仕事をするためには、下にあかりを出さなきゃできやしな
いぞ」

「だって、空襲警報の出ている少しの間だけ消せばいいのじゃないか。それをやらないから、非国民に違いないや。オイ皆、いくらいつても駄目だから、電球をとつてしまおうよ」

ワイイという少年の声、家の中からキヤーツとあがる悲鳴、靴屋のおじさんは棒をもって少年の方に打ちかかってくる。

「コラ、待て、この非常時に、喧嘩するのは誰だッ」

バラバラと近づく足音——格闘の中に飛びこんできたのは鍛冶屋の大將だった。

「なんだ、これア……防護団の少年と、靴屋さんじゃないか」

「そうだよ、靴屋だよ……」

「まてまて、これアどうしたのだ」

そこで、靴屋のおじさんと少年たちとの言い分ぶんをじつと聞いていた鍛冶屋軍曹は、やがて、強い感動をあらわしていった。

「よくわかったぞ。……少年たちは任務に忠実で、実に感心した

ぞ。それから靴屋のおじさんもこの非常時におちついて仕事をはげんでいるのには感心した」

「でも、あかりを消さないから、非国民だい」

「これこれ、もうすこし黙っていなさい。……そこで少年たちよ。今後、帝都が空襲されることは、たびたびあると思う。空襲警報もたびたびでて、何時間も非常管制がつづくことだろう。ところがいまは平時とちがって、戦争中だ。戦争は軍人だけでは出来ない。沢山の品物が入用だ。国民は、平時よりも仕事が忙しくなる。すこしでも仕事を休むことは国家の損なのだ。非常管制のたびに、全国の工場が仕事を休むとしたら、戦争に使う品物の製造は間に合うだろうか」

「……」

少年は皆、黙っている。

「品物が間に合わんと困る。いま、お前たちのゴム靴に穴があいていたでしょう。直しにやったが、非常管制で穴を直すことができなかつたらどうだろう。お前たちは穴のあいた靴を履いて、往來を歩いている。そこへ敵の飛行機が糜爛性の毒瓦斯イペリツトを落した。さあ漂白粉（さくらしこ）をバケツに入れてその上に撒かないと、沢山の市民が中毒する。さあ行け、といわれたとき、穴のあいたゴム靴を履いていて、それでイペリツトの上を歩けるかね——」

鍛冶屋軍曹の言葉は、火のようにあつかった。

「それは歩けないだろう。靴の穴が直つていなければ、消毒に行

けないし、無理に行こうものなら、穴からイペリットが染みこんで、足の裏が火ぶくれになる。ひどければ、そこから身体が腐り出して死んじまう。そうなるのも、元は何から起ったことだといえ、非常管制のとき靴屋の仕事を休んだためだ。どうだわかったらう。——灯火管制で、外から灯を見えなくすることは防衛上もちろん必要なことだ。だがサア空襲だ、ソレ電灯のスイッチをひねって真暗にしてしまえ……では感心できない。外からちつとも見えなくすると同時に、家の中で仕事が出来るようにして置くのが、もつともゆきとどいた灯火管制のやり方だ。そういう人は非国民どころか、甲の上の模範国民だ、そうだろうが……」

非国民と悪口をいった靴屋のおじさんが、模範国民だと聞かき

れて、少年たちは眼をパチクリ。どうして、靴屋のおじさんにあやまろうかと、小さい頭を寄せてコソコソ囁ささやいていたが、やがて、一人の少年が一番前に出て、直立不動の姿勢をとると、両手をあげて大声で叫んだ。

「甲の上の、靴屋のおじさんとおばさん、バンザイー」

「うわーッ、バンザイー。バンザイー」

思いがけない万歳の声に、靴屋のおじさんは、びっくり仰天したが、ハラハラと涙をこぼし、溝どぶ板いたに立ちあがるなり、

「忠勇なる少年諸君、バンザイー。……おじさんも仕事をはげむから、どうか御国のために、帝都の防衛のことはみなさんによく頼んだよ。おじさんは嬉しい……」

そういう声の下に、そこにニコニコと立っていた鍛冶屋の鉄造の胸にワツと行ってすがりついた。

孝行の防毒室

防空飛行隊の強行偵察のかいもなく、帝国領土内に侵入したと思われた敵機の行方はいかにわからなくなってしまった。防衛司令部へは「敵機ヲ発見セズ」という報告ばかりが集ってきた。各地の監視哨からも、なんの新しい報告も入ってこない。——帝都

の附近は、午後十一時になって、ひとまず非常管制が解かれた。

「空襲警報解除！ 只今より警戒管制！」

こんな夜更よふけに、睡りねむもやらぬ少年団は、命令一下、まっくらな町を、寺の塀外を、そしてまた溝板のなる横町を、メガホンを口にあて大声で知らせて歩いた。

警戒管制に入ったので、町は少し明るくなって、住民たちは蘇そ生の思せいおもいだった。防護の人々は、交替に休むことになった。

どこからともなく、ホカホカと湯気の立つ握飯が運ばれてきた。大きな西瓜すいかをかつぎこんでくる紳士もあつた。少年たちを、それぞれ家に帰らせようとしたが、なかにはどうしても帰らないで、この天幕テントの隅で寝るといふが、なかり屋もあつた。とにかく帝都の

町々は、ちよつと、ひといきついたという形だった。

旗男少年は、どうしたのであろうか。彼は今朝東京へ帰つて来たが、いろいろ旅のつかれで弱りこんでいるのだろうか。そういえば、彼の姿は、防護団のなかにも見えなかつたが。

いや、その心配はしないでよろしい。この朝、旗男は家へかえると、すぐ弟と妹とに手伝わせて防毒室を作りにかかつたのだ。

旗男は両親と相談して、洋間の書齋を第一防毒室にすることにきめた。そしてまず、窓のガラスは、外から大きな蒲団ふとんでかくし、その上に、長い板をもつてきて、蒲団をおさえつけるようにして両端をとめた。これなら爆弾のひびきでガラス窓がこわれ、そこから毒瓦斯が入ってくるという心配はない。

その次は、畳をあげて、床板の隙間に眼張をはじめた。兄弟三人ともお習字の会に入っていたので、手てならい習につかつた半紙の反ほ古ごがたくさんあつたから、これに糊をつけて、二重三重に眼張をした。それができると、その上に新聞紙を五枚ずつおいて畳を敷いた。これで床下からくる瓦斯は防げる。

「こんどは窓まど框わくと窓の戸との隙間と、それから壁ふすまの襖ふすまの隙間に、紙をはるんだよ」

洋間風にこしらえた部屋だったから、隙間はわりあいにかつた。

扉が二つあつたが、一つは諦めて眼張をした。一つの扉から出入りすることにして、その内側には毛布でカーテンをおろした。

これは昨夜、汽車の中で鍛冶屋の大將のやったのを見習ったのだった。——これで、第一防毒室はできあがった。しかし、仕事はそれですんだのではなかった。

こんどは、防毒室の前の部屋に、同じような眼張をした。これが前室だった。

「いいかね。外から入ってくる時は、この前室をとおって、それからもう一つ奥の防毒室に入るんだよ。つまり家の外の毒瓦斯は途中に前室があるので、奥の防毒室には瓦斯がほとんど入ってこないというわけさ」

「あら、うまいことを考えたのね。どこで教わってきたの」

「なアに、『空襲警報』という本があつたのを知っているだろう。

あれを本箱の中にしまっておいた。それを、今日は引ぱりだして、見ながら作っているんだよ。ハツハツハツ」

「まあ、その本をしまっておいてよかったわね、兄さん」

「さあ仕事はまだある。急いで急いで」

旗男は、さらに竹男と晴子とをうながして、前室にあてた八畳の部屋にある押入の中のをドンドン外に出して、この押入に眼張をほどこした。

「兄さん、ここは、お手伝いさん用の防毒室なのかい」

「そうじゃないよ。お手伝いさんも皆と一緒だ。これは、万一、第一防毒室が壊れても逃げこめるように作ったんだ。つまり第二

防毒室さ」

旗男は、これでもう大丈夫だと思った。それに防毒面が一つあるから誰か時々これをかぶって外に出て、ちよつと防毒面と頭の間に指で隙間をつくり、嗅かいでみればよい。

窒息性のホスゲンは堆肥くさく、催涙性のクロル・ピクリンはツーンと胡椒こしょうくさく、糜爛性のイペリットは芥子からしくさいから、瓦斯のあるなしはすぐわかるのだ。

「お父さんも、お母さんも、もう安心ですよ。すっかり防毒室が出来ました」

両親は旗男たちの働きを、病床から涙をだして喜んだ。旗男の旅行で、遅れていた家庭の防護設備も、兄弟の協力でどこの家にも負けないくらい堅固に出来あがった。

三人の兄弟は、にわかには腹がドカンとへつたのを覚えた。そこへ、お手伝いのお花^{はな}さんが山のように握飯をもつて入ってきた。

三人はウワーといつて、まわりから手を出した。

「ああ、おいしい」

「町の防護団でも、いま、おにぎりを食べていますのよ。ホホホ」

お手伝いさんは笑ってつけた。

夜は、不安をみなぎらせたまま、だんだんと更けていった。ひどく蒸暑い夜だった。

防護団は時間をきつて、警戒員を交替させた。衛生材料がいっぱいつまった赤い十字のついた大きな箱が配給されてきた。どこ

からどこへ行くのか、重機関銃をもった一隊の兵士が、肅々と声もなく通りすぎていった。

「鍛冶屋の大将。今夜は来ないらしいね」

「おお分団長。警報は出ないが、しかし油断はならないぜ」

暁の空襲警報

茨城みなと県湊町の鮪まぐろぶね船が四艘そう、故郷の港を出て海上五百キロの沖に、夜明を待っていた。

その鮪船は、いずれも無線の送受信機とアンテナとを備えていて、魚がとれると、遠く内地海岸の無線局を呼び、市場と取引の打合せをすることができるのであった。

磯^{いそぎち}吉という漁夫の一人が、用便のために眼をさました。東の

空は、もうかなり白みがかっていた。舳^{へさぎ}に立つと、互に離れないように、艦^{とも}と艦とを太い縄で結びあわせた僚船の姿が、まだ寝足りなように浮かんでいるのが見えた。この天気では、今日もどうやら不漁^{しけ}のような気がする……と思ひながら、彼は明けゆく海原を前にして、ジャアジャアと用をたしはじめた。

そのときであつた。

「はてな、変な音がする……」

彼はふと遠い空から、異様な響ひびきの聞えてくるのをきいたのだ。

「ああ、そうか。……こいつはまた海軍の演習にぶつかつたかな」
海にくらしている彼等にとつて、何よりも嬉しいことは、思いがけぬ海上で、わが艦隊の雄姿を見ることだつた。これも、演習で、海軍機が飛んでいるんだろう。……

「だが、海軍機にしちや、すこし音が変だな。非常に音が高いし、その上、おそろしく響く音だ！ なんだらう」

磯吉はまだ気がつかず、ボンヤリと眺めていた。怪音は、すばらしい速さで、ゴウゴウと大きくなつてきた。音の来る方角が始めてわかつたので、磯吉は好奇心にかられながら、なおも空を見上げてみると、やがて晴れゆく朝霧の向こうに認められた機影！

一機、二機、三機、……

いやそれどころではない。たいへんな数だ。しかも驚いたのは、その飛行機の形だ。まるで蝙蝠こうもりを引きのばしたような、見るからに悪魔の化身のような姿！ 長いこと飛行機は見てくらししたが、こんな飛行機を見たのは、後にも先にもたつたいまが始めて……。 「あッ、これア大変だ！……起きろ起きろ、みんな！ 妙な飛行機が通っているぞう！」

磯吉はドンドン足を踏みならしながら、大声で呼ばわった。その音に、漁夫たちは、下から裸のままゾロゾロと駈けだしてきた。 「あッ、これはいけねえ」

と叫んだのは、昨年航空隊から除隊して来た太郎八たろはちという若者

だった。

「……変なところを飛んでいるが、これは確かにS国の超重爆撃機だ。……さあ早く、これを〇〇無線局に知らせなきゃア」

敵機の大集団きたる！ この鮪船からの警報は、それから数分ののちに、〇〇無線局を経て東部防衛司令部に達した。――

「〇〇無線局発。午前五時十五分、北緯三十六度東経百四十三度ノ海上ニアル茨城県湊町在籍ノ鮪船第一 ダイトクマル 大徳丸ハ有力ナルS国軍用機ノ大編隊ヲ発見ス、高度約二千メートル、進路ハ西南西。

超重爆撃機九機ヨリナル爆撃編隊七隊ナリ。以上」

超重爆六十三機の一大爆撃編隊の強襲だ！

防衛司令部は、俄にわかに活気づいた。

警報の用意が命ぜられた。

五百キロの海上だとすれば、あと二時間位で帝都の上空に達するはずだった。海上の防空監視はむづかしい。

この発見がもうすこし遅かったら、どうなっただろう。思っても冷汗が流れる。

用意は出来た。

香取司令官は、厳然として「空襲警報」を下命した。

警報の発令と同時に、防空飛行隊にも出動命令がくだった。つづいて高射砲隊などの地上防空隊へも、それぞれ戦闘命令が発せられた。

マイクロホンの前で、中内アナウンサーは、命令遅しと待つほ

どもなく、香取司令官は手をあげた。

「ラジオ放送で一般に通報せよ。——司令部発表、南及び北関東地区、午前五時二十分、空襲警報発令！」

アナウンサーは、司令官の命令を復誦した。

「よろしい。落ちついて放送せよ」

アナウンサーは大きくうなずいて、マイクロホンに向かって唾つばをのんだ。さすがに顔の色がちがっている。

伝令があわただしく駈けてゆく。参謀が地図の上に赤鉛筆で数字を書き込む。副官が奥の戸棚から大きな掛図を小脇にかかえてきて、下士官に渡す。下士官は要領よくそれを壁に掛けてゆく。

ジ、ジ、ジーとしきりにベルが鳴る。着つけ剣けんをした警戒兵がド

ヤドヤと入ってきて、扉の脇に立つ。——防衛司令部の中はまるで鉄工場のように活発になった。

暁の夢を破られた市民は、ドツと外にとびだした。サイレンがブーツ、ブーツと息をつくように鳴っている。夜霧でびっしより濡れた朝の街路の上を拡声器から出るラジオの音がガンガンと響いてゆく。

「……空襲警報……空襲警報が発せられました。敵機は約二時間以内に帝都上空に現れるものと見られます。あッ……、ただ今、防衛司令官から諭告が発せられる模様であります。……香取閣下を御紹介いたします」

それにつづいて、香取將軍の重々しい声が響いてきた。

「私は香取中將であります。先程の発表にありましたるごとく、有力なるS国爆撃機隊は太平洋上より刻一刻、帝国本土に接近しつつあります。本官は既に防衛諸部隊に命じ、虐非道の敵隊の撃滅を期しております。さりながら悪運のつよき敵機の一部が、本土内に潜入するやも計りがたく、ここに於て忠勇なる国民諸君の、一大奮起をお願いする次第であります。沈勇と忍耐と協力とにより、完全なる防護を尽くされんことを希望してやみません。おわり」

このラジオを聞いた東京市民は、ただちに立つて、大日本帝国万歳を絶叫した。暁の町から町を、熱血みなぎる声は、つよくつよくこだましていった。

恐ろしき空中作戦

正確にいうと、午前七時二十分——怪翼を左右にひろげた敵の爆撃機は、ついに帝都の上空にその姿をあらわした。

「おお、来た来た。あれが敵機だッ」

「うーん、やってきたな。さあ落せるものならどこからなりと、爆弾を落してみやがれ！」

市民は南の空をにらんで、覚悟を固めた。

しかし、敵機は、どこを潜^{くぐ}つて帝都上空に侵入して来たのだらう。

さきに、太平洋の鮪船から発した「敵機見ユ……」の警報にあつたとおり、S国の日本空襲部隊は、超重爆撃機九機よりなる編隊を、次々に連ねて、東京へ東京へと、爆音もの凄く進撃をつづけたのであつた。

わが防空監視船の警報は、あとからあとから防衛司令部へとどいた。

「爆撃機八九機ノ編隊七箇ヨリナル」

「爆撃編隊ハ高度約二千メートル、針路ハ真西ナリ」

「針路ヲ西南西ニ変ジタリ」

「只今上空ヲ通過中ナリ」

こうしてS国の空襲隊の様子は、手にとるようにわかつて来た。防衛司令部からの命令で、志津村と谷たにざわ沢村との防空飛行隊に属する戦闘機〇〇機は、すでに翼を揃そろえて飛びだした。

ところが敵空襲部隊は、本土にあともう百五十キロというところで、急に陣形を変えた。

モロレフ司令官は、光線電話をもつて、第一編隊長ワルトキンに、いそいで命令した。

「ワルトキンよ。貴隊は犬吠崎いぬぼうさき附近から陸上を東京に向かい、工業地帯たる向島区、城東区、本所区、深川区ふかがわを空

襲せよ。これがため一^{キログラム}匁の焼夷弾約四十トンを撒^{さつぷ}布すべし！」

「承知！ 我等が司令！ 直ちに行動を始めん」

焼夷弾を積んだこの第一編隊は、本隊から離れると、犬吠崎をめぐ^{ぼくしん}めてかけて驀進していった。

「第二編隊長、ミルレニエフ」

「おう、われ等が司令。破甲弾の投下準備は既に完了しあり」

「貴官は東京湾上より北上して、まず品川駅を爆撃したる後、丸^{まる}の内^{うち}附近より上野駅附近にわたる間に存在する主要官公衙^{かんこうが}その他重要建造物を爆撃し、東京市東側地区の上空に進出すべし。但し、東京市上空に進入の時期は第一隊より五分後とす」

「承知」

第二編隊は爆撃隊だった。

すぐに機首を西南の方に廻して、本隊を離れていった。

「第三編隊長、ボロハン！」

「おう……」

この編隊は、地雷弾と毒瓦斯弾とを半分ずつ持っている。

「貴隊は松戸まつど附近より、東京の北東部にて、まず環状線道路及

び新宿駅を爆撃破壊したる後、東京市北部及び西部の繁華なる市

街地に対し瓦斯弾攻撃を行い、住民をして恐怖せしめじょうらん擾乱を

惹起じやつきせしむべし！」

「承知！」

第三編隊も、隊列を離れていった。第四編隊と第五編隊とは毒

瓦斯と焼夷弾、第六編隊は地雷弾をもって、川崎かわさき横浜よこはま方面の爆撃を命ぜられた。毒瓦斯弾と細菌弾とを持った第七編隊にも特別な命令がくだった。

恐るべき作戦だった。このまま彼等の思い通りに爆撃が行われるとしたら、東京、横浜、川崎の三市は、数時間のうちに死の都となってしまうだろう。

司令官は、第七編隊を率いて進撃しつつ、ニヤリと笑って、「さあ、これからいよいよ日本帝国を亡ぼし、東洋全土をわがS国植民地とするその最初の斧おのをふりおろすのだ。ああ、愉快！」と、航空地図上の日本本土の横腹に、赤鉛筆で大きな矢印を描き、更に日附と自分のサインを誇らしげに書き入れた。

空中の地獄

空襲して来た敵機隊との最初の空中戦は、銚子海岸ちょうしを東へ去ること五十キロの海原の上空で始まった。——志津飛行隊に属する戦闘機隊が、敵の第一編隊を強襲したのだった。……

つづいて、その南方の海面の上空で、谷沢飛行隊と、敵の第二編隊とが出合い、ここでもまた物凄い地獄絵巻がくりひろげられていった。

グワーン、グワーンとうなる敵の機関砲。

ヒューンといかないでは宙返りをうち、ダダダダダーンと、敵機にいどみかかるわが防空戦闘機。

あッ、戦闘機が翼をうちもがれて、グルグルまわりながら落ちてゆく。と見る間に、敵の一機も真黒な煙をひいて撃ち落された。こうした激しい空中戦が、敵の各編隊を迎え、相模湾^{さがみわん}上でも、東京湾の上空でも行われた。

口径四十ミリの敵の機関砲は、思いの外すごい力をもっていた。わが戦闘機は、敵に迫る前に、この機関砲の餌食^{えじき}となつて、何台も何台も撃ちおとされた。

しかし、その間に、敵機の数もまた一台二台とへっていった。

勇猛果敢なわが戦闘機は、鯨しやちのように食下つて少しも攻撃をゆるめないのだ。上から真逆まっさかおと落しに敵機へぶつかつて組みあつたまま燃落ちるもの——壮烈な空の肉弾戦だ。

敵の陣形はすっかり乱れた。

舵かじをかえして、太平洋の方へ逃出すものがある。のがすものかと追いかける戦闘機、中には逃足を軽くするため、折角せっかく積んで来た五トンの爆弾を、へどのように海上へ吐き出して行くのもあった。

ただ、各編隊を通じて十機あまりは、雲にまぎれて戦闘の攻撃機をのがれ、東京へ東京へと、呪のろいの爆音を近づけつつあつたのだ。

しかし、東京の外側を幾重にもとりまく各高射砲陣地が、どう

してこれを見のがそう。ねらいすました弾丸は、容赦もなく敵機に噛みついていった。

翼をくだかれて舞いおちるもの。

火災を起して、大爆音とともに裂けちるもの。

傷ついてふらふらと不時着するもの。

数十分前に、意気高く「東京撃滅！」を叫んだあの六十三機の大空軍は、今その姿を失おうとしている。

だが、安心するのはまだ早い。東京湾上の雲にひそんだ一機、二機、三機——が死物ぐるいに帝都の空へ迫っているではないか。

爆撃下の帝都

魔鳥のような敵機の姿はついに品川沖に現れた。海岸の高射砲は一せいに火蓋ひふたをきつた。その煙の間を縫うようにして、見る見る敵機は市街の上……。

けたたましい高射機関銃の響が八方に起こつた。

敵機の翼の下から、蟻ありの卵のようなものがパツととびだした。

その下は、ああ、旗男たちの住む五反田の町！

「あッ、爆弾投下だッ。うわーッ、この真上だぞう……」

この爆弾の雨をみた旗男は、高台を駈けおりながら、大声で叫

んだ。——彼は空襲の知らせを聞くと、病める両親をはじめ家族たちをすぐ防毒室の中に入れ、あとのことをお手伝いさんと竹男に頼むと、自分は少年団の一人として、町にとびだしてゆくところだった。そのとき旗男は大事な持物を忘れなかった。右肩には防毒面の入ったズツクの鞆かばんを、また左肩には乾電池で働く携帯用のラジオ受信機を、しっかりと身体につけて出た。

「うわーッ、あれあれ。爆弾だ、爆弾だ」

「あわてるなあわてるな。落ちるところを注意している！」

鍛冶屋の大将は おおわらわ 大童で防護団を指揮していた。

町々からは恐怖の悲鳴がまいあがる。

ガラガラガラガラ！

ドドーン、ドドーン！

破甲弾よりは、ややひくめながら叩きつけるような大音響とともに、パーツとたちのぼる^{かえん}火炎の幕！

うわーッという^{せいさん}凄惨な人間の叫び！

町まで出てきた旗男は実をいうと、気が違いそうであつた。しかしここで気が違つては日本男子ではないと思つて、一生懸命、自分の手で自分の頭をなぐりつけた。ゴツーン、という音とともに感ずるズズーンという痛み、そこでハツと気がついた。

「あッ、焼夷弾が……」

向こうの屋根に小型の爆弾が落ちたと思うと、パツと眼もくらむような光が見えた。

「こつちだ、こつちだ」

「おお」

鍛冶屋の大將が声を聞きつけとんできた。

「オイ皆、早く消しにゆけ。防火班、全速力だッ！」

手近にいた者が駈けだそうとすると、その前に、またつづけさまに三発、ドドドーンと白煙が天に沖ちゆうする。

「うわーッ、やられたッ……」

と鍛冶屋の大將が叫んだと思うと、どうと倒れた。

「おお、担架たんか、担架」

「イヤ何、大したことはない」

大將はムクムクと起き上ってきて手を高くあげた。

「砂だ、砂だ。オイお前は、ホースを引っぱれ。早く早く。落ちついて急げ！」

防護団はあまりの強襲にあつて、頭がカーツとして、何がなんだかわからない。

手あたり次第、眼にとまった方に駆けだしてゆく。これではない。もっと落ちつかねば……と気がついた旗男は、ふと天幕テントの中に、赤い房のついたラツパを見つけた。

「そうだ、これだッ」

旗男は天幕の中にとびこんで、ラツパをつかむより早く、口に当てて、タタタア……と吹鳴らし始めた。それは勇ましい戦闘ラツパだった。

タツタ　タツタ　タツタ　タツタ　タツタ　タツタ　タツタ

「おお、戦闘ラツパが鳴っている！」

「おお、あれは誰が吹いているのだろう」

りゆうりよう

鬨　　曉　　たるラツパの音を聞いた人々は、にわかにながをとり
もどし始めた。

「おお、旗男君。さすがに、やるなア！」

と鍛冶屋の大將は頭をふった。そして腹の底から声をふりしぼ
って叫んだ。

「そオラツ！　今あわてちやいかん。がんばれがんばれ。あと十
分間の我慢だ！」

火災は幸いさいわにして、日頃の訓練が物をいって大事に至らずにす

んだ。

「……瓦斯ガスだッ、瓦斯、瓦斯！」

坂上から、伝令の少年が自転車に乗って駈けくだってきた。

「ホスゲンだ、ホスゲンだ。……防毒面を忘れるな」

「毒瓦斯が流れだしたぞう……」

恐怖の的の毒瓦斯弾が、落ちたらしい。それつとあるので、防護団の諸員はお揃そろいの防毒面をかぶった。警報班員は一人一人、石油缶を肩からつつて、ガンガン叩いて駈けだす。

「瓦斯は坂の上の方から下りてくるぞ。防毒面のない人はグルツとまわって風上へ避ける。なるべく高い所がいいぞ。そこを、右へ曲って池田山いけだやまへ避難するんだ！」

旗男は後に踏みとどまって、坂上から徐々に押しよせてくる淡緑色の瓦斯を睨みながら、さかんに手をふった。彼は、勇敢にも時々防毒面と頭との間に指ですき間をつくり、瓦斯の臭をかぎわけようとつとめた。

地上の地獄

ウウウーと、物凄い唸うなりごえ声をあげて、真赤な消防自動車が、砲弾のように坂を駈け上っていった。麻布あざぶの方に、烈々たる火の

手が見える。防毒面をつけた運転手は、防毒面の下で半泣はんなきになっていた。それは爆弾がこわいわけではなかった。早く火元へ駆けつれたくても、あわて騒ぐ市民がウロウロ道に出てくるので、あぶなくて思うように運転が出来ないからだ。あッ、また向こうの横町から洋装の女がとびだしてきた。

「あぶない！」

運転手はわめいた。サイレンは、さらに猛烈に咆ほえたって、女の前をすれすれに駆けぬけた。

燃えやすい帝都に、一箇所でも火災をだすことは、この際一番おそろしい。ぜひとも早く消しとめなければならぬと、消防隊は一生懸命なのだった。

火事はお邸町やしきまちだった。

消防隊員はバラバラととびおりて、直ちにホースを伸ばしていた。物凄い火勢だ。どうして焼夷弾を消さなかったんだろう。

「……実にけしからん」

と小頭こがしらが頭をふって怒りだした。

「この辺の邸は、どこも逃げてしまって、なかには犬つころがい
るだけだ。実にけしからん。だから焼夷弾が落ちても、誰も消手けして
がないのだ。非国民もはなはだしい！」

消防隊員を憤慨させたこの辺一帯の避難民はどうなったである
うか。彼等は甲州の山奥に逃げこむつもりで、新宿駅に駆けつけ
たが、たちまち駅の前で立往生をしてしまった。あまりに夥おびただしい

避難民が押しよせたので、もう身動きもできなかつた。駅員の制止も聞かばこそ、改札口をやぶり、なだれをうって一部はプラットフォームに駆けあがり、そこに停車していた列車にわれがちに乗りこんだが、そこでも百人近い死傷者が出た。

列車の中にはいれない人は、窓の外にぶら下り、屋根の上によじのぼった。

それは地獄絵巻のように、醜くも恐ろしい光景だった。……そんなに努力して乗りこんだのはいいが、列車は遂に発車しなかつた。防衛司令部が警備の目的のため、列車の出発を中止させたのだ。

ところが、悪いときには悪いことが重なるもので、そのうちに、

こちらへ廻って来た敵機が、おびただしい爆弾と、焼夷弾とを投げおとして、新宿駅のまわりは、たちまち火の海となつてしまつた。

消防隊も、防護団も、ぎっしりの群衆に邪魔されて手の下しようがなく、アレヨアレヨと、死人のふえるのを見ていなくてはならなかつた。

まったく恐ろしいのは共同の精神をうしなつた群衆だつた。

敵機は去つたが

「ウム、また次のやつが来るかも知れない。六十三機というのが、さつきは三機だけだったからな。まだ油断はならんぞ！」

防護団といわず、女子供といわず、みな不安にみちた眼をあげて空を仰いでいる。

「ラジオはどうしたッ」

鍛冶屋の大将がどなった。少年団の一人が天幕テントの中へかけこんだ。……が、すぐ真青になって、天幕からとびだしてきた。

「班長、駄目です！」

「駄目？　なにが駄目だッ」

団員はハツとして、少年の方を見た。

「……ラジオが鳴らないんです」

「鳴らない！ 壊れたのかな」

「班長！」

と旗男がいった。

「これは、きつと送電線が爆弾にやられて、ラジオが駄目になったのですよ」

「ラジオが駄目になったとは困った」

と、いって天幕の中に入っていったが、気がついて電話をかけてみた。大将の顔が、また暗くなった。

「どうしたの」

「いや、電話も駄目だ。電線はみなやられたらしい……さあ大変、

これじゃ大事な耳も眼も利かなくなつたも同然だ」

「するとサイレンも鳴らないんだな」

「これはいかん……」

団員一同は、離小島に残されたような心細さを感じた。

そのとき一台の自動車がやって来て、中から見なれない背広服の男がおりて来た。そして天幕の方へツカツカと寄ってくるなり、

「……皆さん、大変ですよ。いま暴動が起つている。下谷^{したや}、浅^{あさく}

草^さ、本所、深川、城東、向島、江戸川などの方から数万の暴徒

が隊を組んでやって来る。帝都を守れなかつた防護団員を皆殺しにするのだといっている。早く逃げないと、皆さんは殺されちま

いますよ……」

「えッ！」

団員はハツと驚いて、互に顔を見合わせた。そんなことが起っているのか？ 俺たちはこんなに闘ったのに、それだのに殺されなければならぬのか。これを聞いて泣きだした少年もあつた。

「流言だよ。そんなはずはない！」

と旗男は叫んだ。

「いや、本当かも知れない！」

ずうたい 図体の大きいわりに、気の弱いパン屋のおやじさんが、半分

かじったパンを手にもつたまま、泣きだしそうな声をだした。

「どうすればいいんだ？」

鍛冶屋の大将も、これには途方に暮れてしまった。同士討なん

て、考えたこともなかった。ラジオも電話も不通では、この騒さわぎはさらに大きく広がってゆくだろう。だが、旗男は、見なれない背広男の言を、どうしても信ずることが出来なかった。——数万人の暴徒が防護団員を殺しにくるなんて、そんなバカバカしいことがあるものか。

「そうだツ……」

旗男はふと気がついた。

送電が停つても、ちゃんと働く電池式受信機をもっていたことを思い出したのだ。放送局の非常用発電ガソリンエンジンも停つていればしかたがないが、もしエンジンが働いていて放送をやっているとしたら、旗男の受信機には入ってくる筈はずだった。——彼

は、たちさわぐ団員のところを少し離れて、肩にかけた受信機を開き、受話器を耳にあてて、ダイヤルを廻した。とたんに旗男の顔が林檎りんごのように輝いた。

「おお、放送をやっている。うん聞えるぞ！」

旗男は地獄で仏に会うの思おもいだった。前もって電池式受信機を作っておいてよかった。非常時には、ぜひともこれがある！ 受話器から出てくる声は小さいが、まぎれもなく、なじみ深い中内アウンサーの声……。

「……以上申し上げましたようなわけで、S国空軍の三機もわが勇猛果敢なる防空飛行隊、高射砲隊によってついにとどめを刺されました。太平洋に逃げたものは、なお追撃中でございますが、

これはもう燃料もあまりありませんので、その最期のほどは知れております。とにかく今回の大空襲で、帝都の被害が案外すくなかったのは、平素からの防空訓練の賜たまものであることは明かでありま
す。東京は只今、二、三火災の所はありますが、一体に静穏であります。防護団にあると家庭にあるとを問わず、この防空第一線を死守されました皆様に、ちゆうしん衷心から敬意を表して放送を終ります。JOAK

「あッ！」

旗男はあまりの嬉しさに、しばらくは口もきけなかつた。

ああ、ついにS国の日本空襲部隊は、わが防衛軍のため全滅されてしまったのだ。

しかも、空襲の損害は意外に小さいものだという。これを聞いたら、敵国の将兵は口惜し涙にくれるだろう。

それなのに、これは何ということだ……かの自動車に乗って、怪しいことをいいふらしてゆく背広男！

「おお、旗男君。生きていたね」

突然に、旗男の肩を叩いたのは、自転車にのって、坂を駆けおりて来た少年——鍛冶屋の大將の子、兼吉だった。

「ああ、兼ちゃん。君が見えないので、どうしたのかと思っていた」

「あツはツはツ。姉さんが中央電話局から帰って来ないので、心配だから行ってみたんだよ」

「どうだったい……無事だったかい」

「ウン。無事だった。五十人の交換手が、みんな死ぬ覚悟で交換台を守っていたよ。警報の連絡に大手柄をたてたんだとき。姉さんなんか、大した元気だった」

旗男は一瞬間、直江津の姉たちの安危を思った。焼崩れる家の下敷になったような気がするが、助つたろうか、それとも……。いや、今はそんなことを考えている時ではない！ 眼前に、大変な流言を吐いている国賊がいるのだ！

「ねえ兼ちゃん。向こうで皆を集めてしゃべっている背広男がいるだろう。あいつけしからん流言をはなっているのだよ」

「どれどれ、あッ、あいつだ。あいつはスパイだよ。さつき丸の

内でも、暴徒が品川の方から数万人も押しよせてくるから逃げろ
といっていた。防護団の人達が捕らえようとすると逃げだした。

あいつはお尋^{たずねもの}者なんだ」

「そうか。そんなひどい奴か。ラジオや電話が切れたと思って、
市民の心を乱してゆこうというのだな。よオし、じゃあ兼ちゃん
と二人して、あの悪漢を捕らえてやろうじゃないか」

「うしろからいって、二人で彼奴^{あいつ}の足を一本ずつ引きたおそう！」

敵国のために、人心を乱そうとしたスパイは、二少年によつて
あばかれ、防護団員に縛りあげられてしまった。団員は大喜びだ
った。その上、敵の空襲部隊が全滅したというラジオ・ニュース
を旗男から聞いたので、防護団員は、その場に躍りあがって喜ん

だ。そして一斉に万歳を唱えた。

ああ遂に、帝都は救われた。大日本帝国の危機は遂に救われたのだ。

*

それから三日して、旗男のところには二つの大きな快報が舞いこんで、彼を有頂天うちようてんにさせた。

一つは、直江津の姉露子と可愛い正坊が、無事にたすかつて、今は小学校の避難所に收容されているという手紙が届いたことだった。

「姉さんと正坊、万歳！」

それからもう一つの快報は、わが精鋭なる爆撃隊が、突如S国

に侵入し、やがて、第二の日本大空襲を準備しつつあった敵の空軍根拠地を散々にやつつけてしまったことだった。S国は、この勇猛なる爆撃のため、再び日本空襲をする力を全く失ってしまった。またS国の参謀本部の中にも、日本人の防空訓練の行きとどいていることをあげて、たとい何百機の爆撃機があろうとも、この上、日本を空襲することは無駄であるという説が盛んになってきたという。

この話は、最近大尉に昇進して、高田の防空飛行隊附に栄転した義兄川村国彦中尉ではなかった川村大尉からの知らせだった。

「にい義兄さん、万歳！ 防空飛行隊、万歳！」

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第4巻 十八時の音楽浴」三二書房

1989（平成元）年7月15日第1版第1刷発行

初出：「少年倶楽部」別冊付録、大日本雄弁会講談社

1936（昭和11）年7月

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2005年8月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

空襲警報

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>